松浦佐用媛石魂録

前編

壹

一名唐蓬大和言葉

E24
252

曲亭主人著
溪齋英泉画

松浦佐用媛石魂録

東京金玉出版社

B 23475

天平二年七月十一日筑前國司山上憶良
謹上
大伴佐提比古郎子特被朝命奉使藩國艤
棹言歸稍赴蒼波妾也松浦佐用嬪面嗟此別易歎
彼會難即登高山之嶺遥望離去之船悵然
斷肝黯然銷魂遂脫領巾麾之傍者莫不流
涕因號此山曰領巾麾之嶺也乃作歌曰
得保都必等麻通良佐用比米都麻
胡非爾比例布利之用利於返流夜
麻能奈

領巾麾山考

領巾麾嶽は。肥前國三根郡。濱嵜の南にあり。むかし大伴挟提彦が妻松浦佐用姫この山に登り。領巾を脱て。その夫の高麗に使する船を麾し所なりといふ佐用姫の事。國史經籍に見えずと雖も。最古くより云傳たるにや。萬葉集巻五に山上の憶良が松浦の歌三首。領巾麾の嶺を詠ぜる歌一首。後人追和の歌四首。三島王 追和の歌一首。すべて九首。佐用姫の事を詠ぜり。されども。歌は巷談街說をとりて。詠出る事おほかれば。國史に合ざるもあり。後生推量の說をもて云とみゆ。當初漢土の望夫石に思ひよりて。領巾麾山の名を設たる歟。又和漢同日の談歟。思ひわきまへ難し。彼望夫石と云ものは。貞婦其夫の役に行に戀死して。化して石となりしには非ず。江山の自然石。人の立望が如きものを斥て望夫と命る事。詩文者流のわざくれなるよし。程伊川の說を引て鎌倉志にいへり。愚按ずるに。望夫石の事は。幽明錄に出づ。又石ならでも。望夫と名づくるもの。忠州に望夫樓。又望夫臺あり大明一統志に見ゆ。又述異記に載る。想思草。五雜俎に見えたる。石雄風。みな望夫石の故事の如し。亦是小說者流の寓言のみ。怪むに足らず。おもふに。我邦。西國の海濱にも。望夫石と稱るもの間ゝぞあり。又鎌倉龜谷の石切山に望夫石あり。志に云。畠山六郎重保。由比が濱にて戰死す。その婦この山に登り。望見て戀死し。終に化して石となりたり。と云傳るとぞ。枯骨の化石もなきにあらねど。和漢の貞婦。化して石となり。その全體を遺す事。いよ〳〵思ひわきまへ難し。かゝれバ領巾麾山の事も。推てしらるべき歟。馬琴嘗按ずるに。日本紀欽明紀に見えたる。調吉士伊企儺が妻。大葉子が歌よく憶良が詠に似たり。疑らくは後人。竊に大葉子が歌をとつて更に領巾麾山の名を設たる歟。こゝに數行を抄書して遺忘に備る事は。おのれ博士にして強て臆說となすにしもあらねど。ある人に領巾麾山の事を問れて。かくは答つ。羞らくは識者の物わらひなるべし。日本紀欽明天皇の紀に云。

天皇二十三年。遣大將軍紀男麻呂。副將河邊臣瓊缶。令討新羅。而其軍不利。時爲新羅所虜。調吉士伊企儺。爲人勇烈。終不降服。新羅闘將。拔刀欲

後編巻五有作者自製目次當合看

姓氏畧目　姓名佚者皆不載焉

（全編主人公）瀬川釆女吉次（松太郎、大伴狭手彦后身）
瀬川浦二郎還如（調吉士伊企儺后身）
博多氏妹布（菊子、佐用姫后身）
根塚氏絲萩（胡子和后身）
凡六員　博多氏千鳥（大葉子後身）
長門向洞龍神（娩口歌二郎得時、海原漢道）

（副傳）北條時宗頼　北條時宗　以上将帥
瀬川健三道孝　博多倍太郎秦久（正延）　博多弥四郎秦延
長崎平左衛門尉頼綱　岬竜村　岬平馬清康　亀谷實
泰　稼名寺實時　秋田城二郎實政　長城野兵太敦宗　嵐
川嘉二郎武行　根塚若二郎（悟默齋）　鳴石林平　鰐口愿
六　以上武士
折竹二三六　折竹二三郎（村澤俊平）　草野三郎　関箓七（木
瀬屋鑿吉　濱添某　荒石勘八　荒石費九郎　海辺某
月篭店九郎　相向棒太　三里派三　以上庶隷
大覚禅師　以上僧徒
南般　木綿姒　岬氏玉鳴　折竹氏手枕　輪果　以上女流
平経高　牛渕九郎清縄　浮簀伊加太郎　檜垣轉島　邉蜆平
次將純（偏哲庵）　岩幕九郎　以上叉賊

こゝに著る草紙物語を。浮萍の根なしごとを種として。水茎のおぼつかなきに。いにしへ人の澄濁ある事を説。善を奨し悪を懲らさ。よほがとえがなとてをなれバ。あげつらふ詩歌なども。伊勢物語の例にならひて。或は古きと今めかしく聞うし。あるは近き状いましへ曲まいひろえさるもおほかり。時しもあれ。夏の夜は短きおのが才をもて。ふかく思ひ。遠く揣る事はようせず。あくるに易き窓の下に。あからさはなる端書して。前編三冊の草紙となし唐蓬大和言葉と名づくるものは。霜に後るゝ。菊の操を義男節婦に比ていふゑ。又この書の一名と。松浦佐用媛石魂録ともいふべし。故いかにとなれバ。領巾麾山に妾をもとめ。望夫石上に子と生を發瑞とを。志かれバ瀬川采女は。後の挟手彦にして。博多秋布は。後の佐用媛とも見なし給ひね。

文化丁卯仲夏提月　曲亭主人再識

松浦佐用媛石魂録前編上巻

東都　曲亭馬琴編次

第一　鏡神宮に祈て孖を生む

肥前國。上古は葦北火國と号ほ。蓋天草の海中に火あり。常に波上に燃ると。いくばくといふを知ず。これを不知火と稱ふ。和名鈔に。肥前と比乃三知乃久知と訓ぞ。又肥後と比乃美知乃之利と訓ぞ。肥といひ比といふ。みな火の謂なり。此國。海に不知火あり。山に硫黄火多し。故に火の國といふ。すべて十一郡。其中に。松浦郡は彼杵郡の西にありて。海邊に属す。日本紀に。神功皇后の九年四月。火前國松浦縣に着御はしくて。自ら祈て宣く。朕西のかた。財國三韓をもとめんと欲を。もし成ことあらば。魚己が鈎をのむべしとて。頓て竿とあげ給ふに。細鱗魚を得給へり。皇后よろこんで。希見物なりと宣ふ。これによりて。時の人其處を名づけて。めづらと稱ふ。今松浦といふは訛れりと見えたり。されバ萬葉集第五に。

健三夫妻祈子之段、是ヨリ発端

松浦川かはの瀬ひかり年魚釣るとたゝせる妹が裳ぬれぬ

と詠るは。此故事と思寄せたる也。又當國三根郡に。領巾麾山あり。松浦に鏡神社あり。みな佐用媛が事迹なりと云傳ふ。或は鏡の宮は。神功皇后。松浦山に登りて。手づから御鏡を安置し給へるを神體とすと云。しかれども源氏物語。新古今集等に。鏡の宮と詠る歌を見れば。佐用媛が事迹とするかとおぼし。源氏たまかつらに。

君にもし心たがはゞまつらなるかゞみの宮をかけてちかはん

新古今。紫式部家集に。

あひ見んと思ふ心はまつらなるかゞみの宮やそらにしるらん

是等の事につきて。奇しき物語あり。今説出すと聽。人皇八十九代の天子。龜山院の御時。肥前國松浦郡。御厨の郷に。瀬川健三道孝といふ。武士の浪人ありけり。其の心ざし正しくて。篤實敦行世に稀なり妻の名を木綿妙と呼ぶ。肥後國葦北郡。水股の海邊なる。濱村の郷士。何がしが女兒へ。父母世を早くして親族もなかりしかば。よきて夫に貞節を盡して。半点も闕る事なし。抑瀬川健三が祖父。道次は往時壽永の頃。源平の合戰に。毎度先登して。大に軍功ありしかば。頼朝卿すなはち相模國に於て。一處懸命の地を宛行ましに。二世将軍頼家の時に。些の過あつて。忽地肥前國の松浦縣に配流さる。斯て後。道次が子。道村が時に。松浦にて僅なる田圃を買求め。今の健三に傳へり。去ば其家富にはあらねど。衣食に乏しからず。夫は武藝文學を所行とし。妻は又和歌を嗜て。いと安らかに世を送りぬ。斯て健三は年四十に餘れども。子と云ものなかりしかば。夫婦久しく是を歎くと雖も。これ人力の及ぶべきにあらねば。いかにともすべなし。さてある日妻の木綿妙。夫にいへりけるは。吾們過世の惡くて。子を擧ず。子孫是より斷絶せば。最歎かはしき事ならずや。去ばとて御身が胤ならぬ人の子を養ひては。木に竹を接さらんやうにて。心ゆかぬ所爲なるべし。世には神佛の祈子と云事も侍り。當處鏡神社は。靈驗新におはしませば。かなはぬまでも。夫婦力を戮して。祈り奉らむやと云に。健三點頭て。げに鏡明神は。佐用媛が所持の鏡を神体とするよし聞ぬ。夫鏡は靈明にして。對へむ照らさずと云となし。かくて夫婦が誠心を盡して祈らんに納

受さ給はざる事はあるべからず。殊に松浦佐用媛は。欽明天皇の御宇。高麗を討し給ふ。大将軍を承はさる。大伴連挾手彦が妻なり。挾手彦高麗へ行時に。佐用媛痛く別を惜み。當國三根郡の高峯に登り。領巾を脱て其船を麾く。悲歎哀傷見るに忍びず。傍なる人不覺に落涙し。遂に彼山を名づけて。領巾麾の嶺といへり。これぞげにも知てぞあるべき。佐用媛が夫婦の別を悲しは。貞節の至にて。吾們子孫の絶んとを歎くは忠孝に係る所なり。去ば古へ人も。

萬葉集山上憶良

銀も金も玉も何せんに。よろづのたからも子にしかめやは

一作まされる宝　一作も

と詠り人として子なきは。先祖への不孝。且國の為に不忠なり。元来此身の愛欲のみにせざると鑑て。神もし人間にありしときの悲みに思ひ比べ給はゞ。何どか憐み給はざらん。いざゝらば。心をひとつにして。祈願を奉るべしとて。是より夫婦諸共に。鏡神社の影を仰ぎ。肝膽を摧て祈けるに。既に百日に満る夜。夫婦が夢に。嬋妍たる美女。枕方に立在。花のごとき。唇を開き。鶯に似たる聲を發して。告て云やう善哉夫婦なるもの。己らはに子孫を祈るこそ因縁あり。天その至誠を感じて。二人に子供を與給ふにこそ。兄には家を嗣し。弟は母に養せよ。然ども。嫡室木綿妙を。生得氣血足らざれば。子を産難し。たし妾を養ば。宿願頓にかなふべし。さはあれ其人を得ざるときは。夥の妾ありとも。子は得がたし。又その人を得さりと云とも。初にも似ず。嫡室嫉妬の心を發す時を。絶て子なし。愈夫婦志を合して。七日が間齊して。諸共に。領巾麾山の麓に到れ。彼處に到る日。かならず薪を負たる賤女にあふべし。瀬川氏の為に。子を産べきを。この女子なり。その期に及ばゞ。露ばかりも疑ずして。彼が身を購ひ。伴ふて。家に歸きよ。生るゝ子供は。其性怜悧からん殊更に兄は文武の才に長されど。兄弟壮年にして厄難あり。これ命運の然らしむる所なり。己が言努々疑ふべからず。と云かと思へば。遠寺の鐘の音枕に響て。曉方近くなりにけり。夫婦夢覺て送に見る趣と物語るに。符節を合すがごとく。實に不思議の靈夢なれば。且かしこみ且歡び。これ疑ふべくもあらぬ。佐用媛の神靈。日来の祈願を納受ありて。かく託宣をし給ふなり末世と雖も信心の奇特あり。最尊しと信だちて。夫婦歡び思ふ事限なし。其時健三は。つらつらと尋思し

ず。又親同胞もある事を聞かず。去る年。人肉經紀がこの里へ将て来れるなり。己は里の長となるに。さる不正事と聞て捨おくべきにはあらねば。件の人肉經紀を捕へ縁故を穿鑿し女子まは親里を問て送り帰らすべく思ひたるは。彼と拐誘し時に。啞剤などとや飲したりけん。絶て一言も、の云となし。事れ為体不便なれば女子とば家にとゞめて下女となし。これを玉嶋と名づけたり。されど縁故分明ならざるによつて。已ことを得ず。五駄の薪を。人肉經紀にとらして放やりぬ。然るに玉島。やゝかの毒氣解て物と云ことを得たれば。其来しかたと問しは如此々々にて帰るべき家もあらずといふ。彼は誠心あるものにて。野山の稼。人は勝きてようするなれば。放遣らん事便なくは思へども。鏡の神社の託宣によつて斯叮嚀に聞え給ふを。推辞申さんは最もかしこし。彼だに異議なくば。往は人肉經紀にとらしたる。薪の價と給はるべし。進らせ候はんと。回答て。玉島を見かへり。汝この客人に伴きて。松浦へ行べしやと問に。玉島答て人の婢妾となるらん事。願はしからず侍れども。往に家公の庇によらずば。なほ劣たる。遊女になるべかりき。さうるに再び此身を賣て人肉經紀にとら

し給ひし薪の價を償んは。元よりの志に侍りといふ。於是談合一決して。健三木綿妙が歡び斜ならず。主人が云に任して玉島が身價と遞與し。なほこの外に。當坐の謝物として一封の銀子を贈りければ濱添とらぞして。これにて玉嶋が衣服を整。この夜は健三夫婦を留て。厚く款待けり。さて健三木綿妙は。次の日早飯果て後。濱添に別と告。玉島と伴ふて。松浦縣に立帰るに。玉島は。主人夫婦に。年来の庇と歡び聞え。傍輩の男女にも。ひとり〳〵に辭別し。裳を引折。草鞋穿しめて。諸共に立出けり。かゝりしかば玉島は。松浦に到てより。健三夫婦に誠心を盡して仕るにぞ木綿妙を露ばかりも妬しと思ふ氣色なく。これを憐む事。骨肉に異ならず。されば鏡神社の冥助によりけん。玉島はその月より有身て。十二月上旬に安産せり。健三も木綿妙も。彼が氣色孕て見ゆるころより。起居につけて心を用ひ。まく〳〵神慮の違ざると尊みて。信心懈ことなかりしに。産たる子は男にて。しかも孖なりしかば深く歡びて。初生を兄と定めて。松太郎と名づけ。後に生れしを弟として浦二郎と呼び。日を經て。鏡神宮へ宮参りさし。子供らが久後と祈て。塵さへきえぞ養育に。母の乳房乏しか

玉嶋生松太
浦二、

健三応召于鎌倉、玉嶌浦太郎別、

らざりければ。二人の子どもを。そだつるに肥立て。その容止の似たる事。一顆の珠を割たるがごとし。這へばたて。立ば歩行めと思ふが。世の中の親心なるに。木綿妙は。己が産る子の思ひをなして。とにかくに玉島をさへ勦れば。玉嶋も。又子は産てもいよゝ己と卑して。木綿妙は敬ひ冊くこと。初に勝れり。今玆は是彼に。年の暮るゝも早く覺え。文應は只一年にて盡て。弘長と改元ありけれ明れば弘長元年の春。鎌倉には。前執權北條相摸守時頼入道。みづから諸國の守護頭人等が奸曲を撈て民の心を知んとて世には病氣と披露して。密々に國々を行脚し給ひければ。九州迄でも押わたりて。瀬川健三夫婦が徳行を知給ひけるにや。弘長二年の秋。鎌倉に立歸りて。善を擧惡を罰し給ふ序に。肥前國松浦縣の浪人。瀬川健三道孝速に妻子と倶して。鎌倉へ參るべきよしと。彼國の守護に仰つけられければ。斯て瀬川健三は思ひもかけず。俄頃の召によつて。取ものも取あへず。行装を整るに。木綿妙は云も更なり。玉嶋俊平等是を祝して用意既に整ひぬ。其時健三は。妻と妾を呼びて云やう。今度鎌倉へ召かへさるゝ事。たからざる吉事也。しかるに。玉島を倶してはいらば。色を好むの譏脫を難し。且此地には。父祖の墓もあれば。玉島に。二男浦二郎を屬て殘しとゞめんと思ふなり。己が所持の田園其半は沽却して。路費とし。半は玉島親子が衣食の料にとらすべし。元來少許の田園なれば。今又その半を減ぜる時は。屋を潤すに足らずと雖も。饑を凌ぐに便あり且既に萬里を隔ては。再會絶て揣難し。永く別を決すべしと云ふ。玉島はくしくし應もせず。涙さしぐみて居たりけるに。木綿妙これを聞て。夫に對ひ。いかなればかく心づよき事を聞え給ふ。平人のうへにても。妻一人妾一人はあるものを今玉島を倶し給ふとも。誰か色を好むと思ひ侍るべき。加之二人の子供等は。今玆漸く三才なれば。何とも思ひわきまへぬを。忽地に引分給はゞ。玉島に物と思はするのみならず。彼等又物の心としるに至りて。一人は父と兄を慕ひ。一人は母と弟を思ひ。さこそ形なくあるべけれ。宣ふ事にはあれど。是のみぞうけ引難しと云ふ。健三頭をうち掉て。己が妻れ言葉過てり。曩に佐用媛の神靈。弟は母に養せよと託宣ありしを忘れ給ひたる歟。已れ元木石にあらざればさまじく得させる子供等を。何を憎しと思はんやは。今日の事に思ひあはせれば。一人を棄よと

告給ひし。神慮には悖難し。玉嶋も過世より定れる。業因と思ひ諦めて。深くな歎きそ。汝今棄らるゝと雖も。老と養ふの子あり。餓と凌に田園あり。寡にてあらんとも。人の妻となるらんとも。心の隨さるべしとて。理と述て聞え知するまゞ。木綿妙は重て應ふべき言もなく。不覺も落涙しさりけるが。玉嶋は情由をよく〳〵と聞ゝ。涙うちかみ。神慮に任すると宣ふと。とかく申さんやうは侍らず。是今生のおん別とこそ思ひ侍れ。なからありとも。己が身いかでか他に伴れ侍るべき。愛子と給はり田園を遺し給ふ上は。ともかくもして守育。時と待侍りなん。親子兄弟乃契竭ぞ。神も憐と見そなはさば。よしや彩の年は經るとも。環會し給ふべしと。健氣には應ふも。おさどこゆなき袖の露。消が如き思ひなり。木綿妙は玉嶋が心の中と推量り。よゝと泣て聲と惜まず。健三も最不便にはあれど。心よはくては思ひかへし。さて村長とはじめ。郷人等に。玉嶋と浦二郎が事とさのみ聞え。船路より下らんとて。兩三日風と侍。遂に木綿妙。松太郎。俊平等を將て。纜を解程に。郷人等も名殘を惜みて。これを送れば。玉嶋は浦二郎をかき抱きて。浪打際まで送り出。さるが別の惜さければ。綱手に携て泣ふける。斯て船子どもは。追風よしと罵りあひ。碇を引揚帆と立て。海原遠く艚出せば。いとゞ涙の玉嶋は。見稚兒も音なく。纜と引放され。撲地と倒まて又身と起し。澳の白帆の波間かくれに。見えざなるまで目送れば。船の内にも健三夫婦。遥に浦曲を見かへりて。眼もうち曇る潮けぶりと。霧さち人となりゆくなぞ。思ひ絶ても堪かねて。玉島も聲と發。いひ殘したる事もあり。かの船なし歸してよ。と叫べば共に浦二郎が。父と兄とが跡と追ひ。さゝやかなる手をあげて。招きつ呼びつ母と子が。はつなかひなき松浦潟に。打よする波はかへれども歸らぬ人と思ひこぶ。數行の涙やる瀬なし。げにや悲しきは死してわかるゝ今般より。生別こそ悲しけれと。昔の人の云々んと。己が身ひとつの秋にして。芦が花散る浦風に招きはたくして轉輾べば。郷人等憐て。さは〳〵に云こしらへ。家路に伴ひ歸りけるが。されば瀬川健三が。佐用媛の社に祈し。因縁遂に脱まぞ。粟と種ては粟と得し。見えてぬ夢の迹を今。領巾麾山の名におひて。玉嶋川の委なき。玉としこゝに遺しおく。いとも奇しき契りにこそ。

第二 陰陽贈答して名初て香し

瀬川夫妻
病没、

瀬川健三道孝は。妻と子供と将て鎌倉に參着せしかバ。時頼入道對面あつて。彼等夫婦が年来の徳行を賞美なし給ひ。すなはち祖父の流刑と宥免あつて。剰新地百貫と宛行るゝよし。御教書を給はりしかバ。健三を深君恩と謝し奉り。遂に鎌倉に宿所を營み。奉公他に萃て。誠忠を盡したり。然るに兒子松太郎は。其性極て怜悧。年六つ七つのころより。教ざるに文武の道に心をよせ。一度聞たる事と忘れず。父母は是と奇みとして。六藝と學ばするに。弓馬劍法は云も更なり。文學手跡その才に堪十歳にして。詩と賦し文を作る。寔に居易管三の風あり。然れども。父これを賞美せず。文は餘力の學なり。只士は。武藝こそ肝要なりとて秘して其才と人に語らず。こゝをもて未だ世に聞ゆる事なし。夫生死は賢愚邪正によらず。顔回は短命にして。盜跖は命長し。されバ瀬川健三夫婦は。忠信徳行の聞えありて。絶たる家と興すと雖も。惜べし。天これが爲に壽を授ず。今茲文永六年の秋のころ。風のこゝちとて打臥たるが。藥餌もその驗と見せずして夫婦うち續て。世と去にければ。松太郎は僅に十歳にて孤となり。雛猿の枝に離れたる如く。追悼の涙乾く間なし。實母玉嶋。弟浦二郎と云もの。松浦

松太郎更
名采女吉次

秋布生、

にありとは聞えながら。生死定かならず。父は元来物がたくて。木綿妙がしのびやかに消息して。安否を問んと云たれども。大に制して一たびも音耗せず。骨肉の義久しく絶たり。只若黨村澤俊平のみ。よろづ信々しく傳きて。後の事なども。叮寧にとり行ひぬ。是より先。時頼入道は。弘長三年十一月廿二日に。享年三十七歳にて逝去あり。嫡男相模守時宗。父祖の箕裘を嗣て。武家の執權たりと雖も。未だ弱年なるによつて。恩遇瀬川が孤に及ばず。松太郎はやゝ十七歳に至りて。初て近習に召加られしかバ。すなはち松太郎と更めて。瀬川采女吉次と名告り。忠勤父に彌まして。聊も私なくいよゝ武藝と勵み。文學と嗜み。君の爲には命と塵埃がども惜まず。古老も既に其才を知て。當世無雙の壯佼なりと稱たりける。是はさておき。こゝに。北條譜代の家臣。博多倍太郎素久が從弟に。博多彌四郎素延と云ものありけり。妻と娶て十年にあまれども。一子だになかりしかバ。夫婦これと心うく思ひながら。その身嫡家にあらざれば。深く後の事をえからんともせず。よりて媒する人あれども養子をむせざりけり。しかるに。文永二年の冬。ある夜彌四郎が妻假寐の夢に。五衣に緋袴したる美女。

秋布謂南殿、邂逅吉次、

ばとて。秋布と名づけさせ。菊の異名を秋しくの花といへばなるべし。夫菊は。異名多き花まで。唐山にはこれを。佳友　壽客　節花　女華　女節　女茎　更生　陰成　傅延年　笑靨金　日精　周盈　落薔　黄花　帝女花（以上十五名）といふ。おの〳〵出處あり。集めて余國用が事物異名に載たり。又我邦にては。菊と。はさり草　百夜草　星見草　形見草　よはひ草　ちぎり艸　かはしも草　おがね艸　からよもぎ　秋の花　とめ花　いなで艸　山れ草　長月花　草の主　秋しくの花といふ。えしほぐさに

あさぢふもはぐるくさ葉もかるゝはで野にのこりけり秋しくの花

この外證歌多し。又冬の菊を。初見草　霜見草　のこり草　雪見草（以上二十名）といふ。藏玉抄。莫傳抄。藻塩艸等に見えたり。されば菊はめでたき花にして。漢に女節。壽客と呼び。和に少女花。はさり草と稱て。霜に後るゝ花の操と。貞女のうへに譬されば。今博多彌四郎が。女兒と菊に象りて。秋布と名づけしも故あり。斯て彌四郎夫婦は。年来の宿望を果しゝ。今此女兒を擧しらば。歡び思ふ事限りなく。挿頭の花と愛慈む程に。秋布二三歳に及びては容止はを〳〵美しく。玉ともて刻成せる如くなり。さて彌四郎が妻。ある日夫に對て。己が女兒の面影は。これが生るゝ年。假寐の夢に見たる上臈によく肖て侍りといふ。彌四郎聞て。げにいはるゝ如く。彼が望夫石のほとりにて。生れしことなどと思ひあはすれば。秋布は。松浦佐用媛の後身にてあるべきとて。いよゝ等閑ならず守育しが。此女兒六七歳のころより書畫をよくし。和漢の書籍を諳じて。詩を賦し和歌を詠じ。やゝ十二三歳に及ては。文章その佳境に入りて。謝女小式部にも恥べからず。加之教ざるに織績所為をよくし。戯れに機を立て。錦など織出せしに。おのづから巧を竭して。意にまかせずと云ことなし。實に是稀なる少女なり。父母は此形勢を見て。あまりに才の長たるを怪み。えし短命にやあらんとて。筆のすさびに心を勞する事を許さず。秋布十五歳に成けるころ。母は持病の積聚にて遂にはかなくなりにければ。哀慕の涙やるかたなくて。詩歌はおのづから廢たりける。しかるに執權時宗朝臣の母公を。南殿と申せしが。その性風流やかにおはしますとて。才ある女子を愛しさまなれば。秋布が事を聞及び給ひて。父の彌四郎に仰つけられ。内々の使をもて。頻にこれ

秋布結怨于鼠川加二郎、

求需るもの。門前に市をなしけり。然ども瀬川采女を。毎日の出仕に暇なしとて。その需に應
ぜず。秋布は推辭に據なくて。十たびに一度は脱を得ず。筆とる事も多かりけり。こゝに又。
北條家の内管領。長崎平左衛門尉賴綱が甥に。鼠川嘉二郎武行と云ものありけり。其身執
權の近習に召使るゝと雖も。心よからぬものなれば。伯父賴綱これを見かぎり。内々義絶し
てよせざりけり。時宗朝臣も。彼が便佞なるをしり給へど。折をもて遠ざけんとおぼせども。な
ほ不便と加えて。形の如く召さはれたり。件の嘉二郎は。心ざしのよからぬのみならず。稚
き時に。友どちと雙陸の目を爭ひ。䰃あふて樓より落けるが。過て左の足を折き。右の眼を
突潰してければ。一目蹇の醜郎となりぬ。しかれども。其醜きには羞ず。殊更に色好
なる男にてありしかば。秋布が才色の比なきを傳聞て。見ぬ戀にあくがれ。ある日腹心の草
鞋奴。荒石勘八と云もの。只一人を倶して。博多彌四郎が宿所に至り。明白に名告りて。齎し
たる扇をとり出し。これに秋布が詩歌を需ければ。此日主人彌四郎は。出仕して家にあらず。若
黨簑七とり次して。かくと告るに。秋布はよくよく聞て簑七にいふやう。鼠川は内管領長崎
氏の甥なるよし。豫て聞ぬ。彼人みづから来たりて。これが墨跡を需給ふに。推辭んは無禮
なり。それさよろしくいひこしらへて。しむしまさせよ。己が身今四五枚の短冊を書をはり
て。その扇ものすべし。と云に。簑七は心得果て。嘉二郎を客房に請じ。こびしくはおはすべ
きが。次第によりて寫め候へば。且くおん待あるべしといひて。次の間へ退きけるが。まてど
もまてども音もせず。嘉二郎麁忽の壯佼なれば。大に倦て座に堪ず。或は蒸襖に立よりて畫
を瞻め。或は網代天井の目を算。彼此を徘徊して。思はずも廊下傳ひに。秋布が居室のほと
りに到り。と見れば。紙障の細やかにひらきたるあり。此處こそ彼少女が居室ならめと猜
して。短き片足を翹 只隻なる眼を斜にして闚窺れば。秋布は餘念もなく机にかゝりて。筆
をふるへる形容。待宵に蜘蛛を詠じたる衣通姫。月の前に源氏を作り出せし。紫式部なり
とも。これには過じと見る程に。これにもあらで足のすゝむを覺ず。秋布は。人のけはひをさる
としれども。聲ともせず。竊にその人を見るに。眼は一つにて片足は蹇たり。これなん鼠川嘉
二郎なるべしとは。衣服の紋などにて推量られしかば。心の中にそのなめげなるを憤 驚

に。嘉二郎答て。惟康親王の雑色。長城野兵太は。和漢の才あり。此えのやしらるべからんと申す。其時々宗朝臣は。これ嘉二郎等が秋布とね さくおもひ。兵太と謀しあはしゝ。斯は云えと猜し給ひ。憎さもにくしとおぼせしらば。うち点頭て。兵太が事は。これよくしりぬ。實此ものよ係しかりけん。時宗思ひ悞て。彼女子と賞美し。虚名を高うせしなんどゝ。世の人に誹謗せらるゝこそ安からね。さらば近きに必らず彼が才學を試みて。己が悞を志るべきえと宣ひしが。次の日博多倍太郎を以て。縁由と母公ゝ聞へ給ふに。南殿を。嘉二郎が申け處。大人志からずとうち腹さて給ひみづから判者となつて。勝劣と。批判をべし。但漢土の故實に于ては。別に判者を立らるべきう。と回答給ひ。にたれば。時宗朝臣をおはち建長寺れ大覺禪師に。志ろ〳〵のよしと仰はらはされ。和の故實は。南殿みづから判者となり給ふべし。漢の故事ゝ于ては。禪師批判せらるべしとなり。さて問答の日と定られ。俄頃に博多彌四郎と長城野兵太と召て。件の仰事あり。彌四郎を其の日。其の時に。女兒を將て建長寺へ參れよ。彼寺に于て秋布が才學の程と試みつべきえ。と聞え給ひぬ事の爲体既に晴がましくぞ。なりにけれ

望夫石

情史靈化篇、新野西河上有石如人名望夫石、相傳一婦送夫從戌別于此、婦悵望久之遂化為石、夫台陳克題望夫石云

望夫處江悠々、化為石不回頭、山頭日々風復雨、行人歸來石應語

癸未七月柳人記章船生

松浦佐用媛石魂録前編上 終

東京金玉出版社

秋布才、屈
敦宗、

にこそ。御身よしなきざくれをして。此禍を惹出し給へりとて。頻に眉根をよせにけり。されど秋布は。騒ざる氣色なく。父上深くな思ひくし給ひぞ。己らは未だ兵太とやらんとしり侍らねど。嘉二郎と親く交る程のものならば。其友と見て。心の底の深き淺きも。推てしられ侍るべうし。よしや己が身。彼人に及ずとも。女子の事なれば。父の恥にあらず彼もし己らはに負たらんには。世の胡慮に侍りなん機に臨み變に應じ。縦全く勝得ずとも。全く負べうは思ひ侍らぞといふに。彌四郎はなほ心もとなけれど。斯て已べきにあらざれば。もつぱら其準備をいさしたる時に弘安三年。十二月十五日。北條相摸守時宗朝臣。今日建長寺に于て。長城野兵太敦宗と。博多彌四郎が女兒秋布が。才學の程を試み給はんとて。豫てその用意あり。判者は執權の母公南殿。并に彼寺の開祖。大覺禪師と定られ。客殿の西を女房として。翠簾を懸こさし。こゝに南殿の茵を儲。東を男房として。慢幕をひきこさし。こゝに禪師の椅子を置。一山の法師ばら。執權家の有司は。男房に着坐せり。抑巨福山建長寺は。いぬる建長五年。十一月廿五日。前執權時頼朝臣これを建立し。大覺禪師を開祖としぬ。禪師諱は道隆。元是異朝　宋國の人にして。後嵯峨院の寛元四年に来朝せりすなはち達磨二十五世の法孫にして。道徳世に比なし。齢八十にあまれども。壜として童顔あり。この聖僧。禪機の要道を得給ひさるのみならず博覧にして詩文によし。こゝをもて時宗朝臣。強て今日の判者に宛られたり。かくて南殿は。己の比及に。博多彌四郎が從弟。倍太郎素久以下。夥の女房たちを將て。建長寺に入来あり。知客の老僧これを迎て客殿の次の間迄。輪を舁入させれば。南殿こゝより輪を出て設の席に着給ひ倍從の女房を主の後方に居並びさり其時大覺禪師は。二人の從弟を將て。南殿に對面し。己られて男房の上坐に着給へば時宗朝臣の名代として。内管領長崎平左衛門尉頼綱。大紋の袖かきあはして。禪師の次に坐し。申次の雜色は。二行に己られて。末坐にあり。又注進の武士六七騎馬を山門のほとりに立て事の爲体を。主君に告まうさんとて。袴のろば高くとり。今かくと待居さり。さる程に書記の僧。磬を鳴らはこと三杵に及で。鼠川嘉二郎は。長城野兵大を將て。東のかさより入り。博多彌四郎は。秋布を將て。西のかさより入り。おのく南殿を拜し奉り。又禪師を拜して對坐

めの字をそえて呼び侍り。むれの約めとなる故なり。されバすゞめハ。すゞと鳴て群る鳥なれバ。すゞめと名づく。つむくらめは。土を食ひて。是も群る鳥なれバ。たむくらめと称ふ。つばくらハ。つちくらふの略称へ。それをなほ略してハ。つむめとも称へ侍り。ひがらめ。山がらめハ。推て知たまへかしと云に。兵太ハなほ負じ魂を逞して。小膝を進めるハそれまでもあるべし。然らばうぐひす。ほとゝぎす。きゞす。からすなんどは。その字をそえて呼べり。又虫にきり〴〵すあり。是等も深き故ありやと問に。秋布答て。件の鳥どもは。巣をくふ事の真實やかなれバ。すの字をそえて呼び侍り。うぐひすハ。鶯食巣にて。うれハしく巣を食ふの謂なり。又ほとゝぎすきゞすのすハ。子にて称美の謂へ。彼が鳴声の。ほと〳〵と聞ゆれバ。ほとゝぎすといふ。是ほと〳〵なきすのなと略せり。からすハから〳〵と鳴をもて名づけ。きゞすハけん〳〵と鳴をもて名づく。かきくけこと通て。きと云もけと云も。其意ハ同じ。又きり〴〵すハ。草葉にすだく虫なれバ。すの字をそえて呼歟。聚をすだくと訓り。すゆを約れバ。すとなれバなりと云。其論水の流るゝが如く。露ばかりも淀なければ。兵太ハ玉なす汗を流し。最朽をしくは思へども其才敵しがたければ。是にさへ負てげり。斯て執筆二人。此問答を書留め。騎馬の武士状もて。時宗朝臣に注進し。舌戦。二回。こゝに事果たりけれバ。博多彌四郎ハ。漸くに安堵て。最歡しげに見えたる状。嘉二郎ハ妬く思ひて。頬のあたり状ぬくようになつ。ひとり憤るといへども。絶て其かひなし。かくて南殿ハ。秋布を近く召て。今日の事。思ひしよりハ抜群なり。世に比なき才女かな。相州も聞給ハゞ。さこそ感じおぼすべしとて。只顧褒賞し給へバ。禪師。頼綱。倍太郎以下の輩も。又これを褒て已ぞ。只鼠川と長城野のみ。いよゝ胡慮とぞなりにける。さる程に南殿ハ。大覺禪師に別を告。秋布を将て歸り給へバ博多倍太郎。同彌四郎以下夥の女房。先方後方に附したがひて。轎に乘し參らせ。平左衛門尉頼綱ハ。少し引下りて。兵太。嘉二郎等を伴ひつゝ。執權の館へぞ參りける。

第五　才を猖で讒奸罪せらる

此日時宗朝臣は。近臣等が注進によりて。秋布兵太が勝敗を。よくしりてハおハせしが。申下刻に及で。南殿ハ。秋布等を将て。建長寺より歸りたまひ。直に時宗朝臣に對面ありて。其日

の為体を。おちもなく物がたり給へば。相州大に感悦あつて。頃日の鬱胸を。やゝ開きぬと宣ひたり。活処に長崎平左衛門尉頼綱は。鼠川嘉二郎。長城野兵太を俱して帰り来つ。すなはち秋布が詠草を呈上を。其時時宗朝臣は。嘉二郎兵太をなべしまかはへ。此愚物。何の面目あつて。再びされに見ゆるぞ。云事あらばいへ聞ん。といたまた高く責給へば。件の二人は背に冷た汗を流し。席薦に頭を摺著て。一言半句も回答をせず。時宗ます〳〵怒て頼綱を見かへり。嘉二郎兵太は。豫てよからぬ行ひありと聞えしかど。格外の憐愍をもて。是非の制度に及ざりしに。這奴等なほ己をしらず。才を猖で上を蔑を。其罪最重からぞや。今は許がたし。とく〳〵追拂ひ候へと仰もあへぬに。頼綱はとよりて。嘉二郎が頭髪をかい摑み。扇をもつて丁々と打すえつゝ。聲をぬり立ていへりけるは。汝が年来の悪行。これ屢々教訓を加へしに。露ばかりも用ひざれば。已ことを得ず。内々義絶すと雖も。恐に叔姪の因は脱きず。共に面目を喪へり。えし聊も恥をしり。其首を繼し給ふ。君恩の鴻なると思ひしらば。水にも沈み。火にも焼きて。人に見らるゝことなかれ。と罵り。矢庭に両刀ともぎとつて掾より撲

地と突落せば。博多彌四郎。又執権の仰を稟て。長城野兵太が大小の刀を掻とり。是とも庭へ突落しぬ。寔なるかな。檜山の火は。檜より出て。遂に檜を焼といふ。今この両人が奸計も又然り。是を慎よ。是を慎よ。汝より出るものは。汝に返るものなりと。曽子のいへるぞ宜なりける。さる程に奴隷等は。笞をとつて嘉二郎兵太を催促し。日来憎しと思へばか。隅春の嫌ひなく。或は打。或は罵て。只顧に追たてゝ。庭門より走らしたり。かくて時宗朝臣は。秋布に砂金十両を給はり。南殿より小袖一襲を賜り。又建長寺へは。博多倍太郎を使者として。大覚禅師へ。夥の謝物を贈りたまふなぞ。秋布は。是日の首尾残る所もなく。剰過分の恩賞を賜りければ。父の彌四郎と共に。執権御母子に謝し申し。軈て御前を退出ける。かゝりしかば。南殿はます〳〵秋布を愛おぼしつ。次の年の春のころより。父の彌四郎を見給ふ毎に。豫ていひつる婚縁はいかにぞや。瀬川吉次を婿にとりてば。あへて不足にもあらじなど宣ふなぞ。彌四郎畏て。女児もやゝ十六歳になり候へば。遠からず媒妁をもつて。吉次にいはせ候べし。と應奉りしが。公務暇なくて。かの年も半はいたづらに過しつ。漸く秋の季に

秋布嫁吉次

經高叛、實政受命討之

至り。親族なれバとて。博多倍太郎を媒妁にたのみて。瀬川采女吉次に婚縁の事をいはするに。事故なく整ひしかバ。すなはち黄道吉日を撰みて。秋布を瀬川が宿所へ送つて遣し。婚姻をとり締ぬ。元彼秋布は。心ざまの風流なるのみならず。夫に齊眉て操節貞しく。奴隷を憐み親族に睦みて。よく内をおさめければ。吉次深く歓びて。偕老の契最深し。浩處に。九月中旬に至りて。京都の守護。北條治部大輔義宗。(泰時の孫重時の二男)同左近大夫時國。(時房の孫。義政の嫡男。この兩大將。京都六波羅にありゆゑに。兩六波羅と稱ふ。執權時宗の親族之)より。鎌倉へ飛札到来す。其故を尋れバ。太宰府の守護平經高は。曩に謀叛の聞えあつて滅されし。北條時輔(時宗の兄之。文永九年謀反によつて。京都にて誅せらる)に。寃あるものなりしかバ。時輔退治の時。軍功ありしによつて。やゝ心驕り。九ケ國の成敗は放に して。國司の所領を押奪ひ。牛淵九郎清繩と云ものを軍師として。俄頃に謀叛を起せしかバ。臼杵河野が徒是に與し。京鎌倉を攻亡して。經高武家の執權たらんと計較めり。これによつて。松浦景隆。大友藏人。菊池原田なんど。經高と合戰し。一時に雌雄を決せんとする處に。

牛淵九郎清繩夥の軍船を造らし。肥前國平戸嶋に押渡て。牛角の勢を張り其機變極りなしと聞ゆ。いそぎ討手をさし向給はずバ。ゆゝしき大事なるべしと書たりける。時宗一覧あつて。俄頃に一族の大小名。内管領頼綱以下の頭人評定衆を召集合。兩六波羅の連署を披露して宣ひけるは。往に時輔謀反の時。西國の逆徒忽地に亡しを。經高一人の功にあらず。時宗が洛の敵を討しによれり。然るを經高武勇に誇り。京鎌倉を亡して。浮雲の富貴を極んといさをとも。天爭か許すべき。天慶の純友は。威を九州に振ふと雖も。身死して葬るに地なし。況てや經高をや。今一員の大将をさし向なバ。一擧して滅ぶべしと宣へバ。みな諸ともに。仰理に覺候とぞ應ける。其時時宗朝臣は坐中を倩と見廻して。秋田城二郎實政を近く招き。今日より足下をもて。鎭西の守護とすべし。いそぎ肥前國へ發向して。はや牛淵を討さはへ。牛淵だに亡なバ。經高は旭に向ふ霜の如けん。とく〳〵出陣あるべしといそがして。軈て上總介に任ぜらる。實政是を承て。諸國の軍勢を催促せバ。事遲々に及ぶべから。只實政が手勢をすぐつて。今夜由比が濱より船を出し候はめ。願くバ文學武略に長たるものを

吉次従軍
秋布送別

一人属られて實政が輔となさしめ給へかしと申ければ。時宗しばし尋思して。近臣瀬川釆女吉次は。年なほ弱けれど。忠義抜群にして。智勇双なきものなれば。此男を将てゆきたまへ。吉次には目今こなたよりいひ知し候べし。と宣へば。實政斜ならず歓んで領掌し。忙しく宿所に立帰りて。老黨草野三郎等に縁由を説知し。今夜月の出る比及に纜を解べしとて。とるものもとりあへず。西國出陣の用意しつ。手勢都合二百餘騎。由比が濱にて着到を記さし。八九艘の大船にとり乗て。其日の暮るゝを待ありける。この實政は。時宗朝臣の曽祖なりし。北條泰時の弟。亀谷實泰の嫡男。稱名寺實時の二男にて。執權の氏族多かる中に。己れと親しき人なれば。時宗これを擇出して。鎮西の守護とし。すなはち上総介に任じて經高追討の大将となし給へり。げに時宗の目鑑を違はず。實政只半日が間に。軍装して。鎌倉を船出する事。人の及がたき所ありとて。親しきも疎きも。嘆賞ざるはなかりしとぞ。此日瀬川釆女吉次は。出仕せざるをもて。彼件の事を知ず。秋布と娶てより。やゝ七日に及び。稀なる休暇なりければ。しばし心ゆるやかに覺へ。其日の夕ぐれに。夫婦端ちかう出て。咲おくれ

たる庭の白菊を詠めけるに。暮ゆく秋を惜む折しも。秋布が父博多彌四郎。馬を門内に乗捨て。瀬川が若黨村澤俊平に案内さし。連忙しく入来ると。主人の夫婦見かへりて。これ思ひがけずとて。やがて坐を立て迎れば。彌四郎上坐に押なほりて吉次に對ひ。執權猛の仰あり。謹で聞れよ。太宰の經高謀反の聞えあるによつて。上総介實政ぬし。討手の大将を承て。今夜鎮西へ船を出さる。然るに實政頻に軍師を乞申ければよつて。便吉次をもて軍監とし。實政の輔とし給はんとなり。いそぎ乗船の用意いたさるべし。申傳る旨斯の如しと述ければ。吉次是を承て。近臣外様多かる中に。弱輩の某。かゝる仰を蒙ること。およばぬ身の面目なり。時を移さず。用意致すべし。と回答するに。秋布忽地うちしをれしが。又思ひかへしけん。えからざる仰を蒙給ひて。最歓しくこそと云。彌四郎は秋布が。心の中を推量りて。聲を低し。吉次猛に西國へ赴くとも。己れ斯てあるなれば。心の及ばん程は。扶持すべし。吉次も後安く思ひ給へ。しかはあれ己が女兒。婚姻をなして。僅に七日。忽地別離に及ぶ事。親の愚痴にてあるべきが。憾くおもふも理りなれど。又會難き別ならねば只心を放して。待給へといひ

慰るに。秋布は胸ふさがりて。果敢〲しくは得應ず。吉次是を聞て。彌四郎にいへりけるは。其が實母玉嶋弟浦二郎といふもの。松浦にありとは聞しかど。三才の時に別れてより。骨肉の義。絶されば生死の程も定かならず。今度彼地に赴きて。經高を征伐せば。事の叙と以て。母と弟が在處とも尋べう思ひ候へば。しらぬ國へ行如くには非ず。わきて心に勇あり。又村澤俊平は。心ざは信やかなるものなれば。留めおきて秋布が。身の護ともいさをべし。其餘の事は。よろづ泰山の庇と蒙べしと云に。彌四郎点頭て。女兒が事は、いはるゝ迄でもなし。足下は元来忠孝の人なり。然れば神佛の擁護によつて。比類なき功名し。實母舎弟にも環會給ふべし。云べき事は種々なれど。私に来れるならねば。猶豫し難し。えや退るなり。といひ果て席を立ば。夫婦是を送る。再び舊の坐敷にかへり。吉次聽て。若黨俊平と呼びて。留守の事を聞えおくに。彼肯ずして云やう。僕幼きより。先君の庇を蒙れば。恩の爲には死べし。と年来思ひて候に。危窮存亡の時に當て。斯宣ふはいと本意なしと呟ば。吉次重ねて汝が云所も。自己の志を舒るのみ。主の爲にせんに行と留と擇ことかは。汝を留おかざれば。

わが心安からず。主に物と思はするが忠ならんや。枉て思ひ留り候へとて。理を盡していひ論せば。俊平は力及ばで。漸くに承引ぬ。吉次又妻に對て。火急の仰を承れば。心いそがはしくて細しうは聞えおかず。思ひ決せざることもあらば。俊平に相語て。爺々に判斷にはかし賜へ。と云に。秋布を涙さしぐみて。わらはが事は。露ばかりも思ひやらせ賜ふな。申すまでには侍らねど。一日〱に肌寒し。遥けき船路は苫に寢。鉾を枕にし給ふとも。みづから愛して身を保ち。逆臣を滅して。母御弟君にも環會。凱陣し給はん事をのみ。ねがはしく侍りとて。名殘としもいへばえに。いはぬはさすが武夫の妻とし見えて哀れなり。

第六 涙を含て節婦義男を送る

かゝりける處に。雜兵一人。喘々走り来つ。門内より呼はゝるは。總州(實政といふ)を。今夜月と共に船を出して。西國へ赴き給はんとて。目今由比が濱に。軍兵を集合給へり。瀬川氏いと遅し。とく參り給へ。といひも果ず。舊の道へ走歸れば。吉次遥に是を聞て。さては實政今夜鎌倉を出給ふなり。やは後れじとて。衝と立あがり。日来床に飾たる。父が紀念の黒皮威。

鎧を取て投かくれバ。秋布はうひ〳〵しく。拿手挽けし星兜と。雄手の脇よりさし出を吉次兜の緒を締きバ。まさ秋布がさし出せ。太刀さへ長し旅路やとて。思はぞ見あはせ妹と脊の別れの鐘は。暁ならで。入相の聲さやかなり。其際に俊平が月毛の馬に鞍おして。掾づら近く牽出を。程もあらせぞ吉次が閃りと乗て手綱掻操。秋布無事に。とゆふぐれに。入日と共に西の海に出船にあれんと馳去れバ。主に後れし馬飼戟持。腹巻に小手臑當し。跡に跟てぞ追たりける。秋布は今さらに。云べきこともいひ果ず。聞くべき事も聞ざれバ。いとゞ名残のをしまれて涙玉なすのみなりしが。思ひかへて俊平にいふやう。龜谷の石切山は。由比が濱と眼下に見る。直に彼處に赴きて夫の船出し給ふを。外ながら見まほしきに。伴ひてよといそがせバ。俊平聞て。げにえからざる別を志給へバ。いとゞ遺憾ぞおぼすべし。折しも月は甲夜より明し。いざ給へと應しゝバ。秋布やうやく涙をおさめ。女の童一人と將て。俊平に郷導させ。石切山へ走りゆく既に彼山の巓にもなりにたり。盛り久しきむら菊の花乃香はいと濃やかなれど。主從露と拂ひもあへず。由比が濱方と見おさせバ浦ふく風も九月の十三夜の月さやかにて。金波長く流きては。玉兎の走る事速く。濤浪近くうち寄せては。鷓鴣の飛ぶこと稀なり。されバ實政の軍船只今纜を解ぬと見えて。三鱗の旗濱風に翻さし弓矢打物と飾立たる。大船八九艘。棹の歌を唄ひつれ。遥に岸を離るれバ。これを見んとて老弱男女。彼此の磯に集合たり石切山には。秋布が見おさば方は眼もえおよに。己が夫は彼船か。この船かとて指せど。それぞとは志るよしもなく。えし乗後き給はずや。嗚呼心もとなしとて。主從眉根を攅る折しも。裁許橋の東なる。延命寺の森の蔭より。鎧たる武者一騎。忽然と走り出濱方へ馬を馳をる形容。指物は色鎧の威毛なんどこそ。定かには見えざらね。天晴雄々しき武者態は。僞がふべくもあらぬその人なり。秋布はこれと見て。さては後れ給ひにき。これいかにせまじとて。主從手に汗握りけり。ともしらずして吉次は。主君に辭別を申さんとて。執權の館へ参りて。時宗朝臣に拜謁し。直に退出て馬を走らしつゝ。由比が濱に来て見れバ。思ひの外に事後れて。船は既に岸を離れ。大洋遥に漕ゆくにぞ吉次吐嗟とこゝろ焦燥。これ朽としとゆふ汐に。馬とざぶと乗入れて。追着んとぞ泅せたる。秋布主從は。この

東京金玉出版社

形勢にはやく殆み。いかに勇くおはするとも。暴虎馮河の悔あるべし。涙風あらき海上と。いつまでか追給ふ。押流されやし給はん。今も沈み給ふかとて。これにもあらでも猶ともに聲を限りに呼び留れど。間遥に遠ければ。とゞかぬもげに理なり。かゝる時には神佛の冥助を仰ふよりほかなしと。主從こゝろをひとつにして。春日八幡住吉四社鏡の神社も曇なし。誠を照らし給へとて。ひたすら丹精を凝しける。又海づらを眺望れば。神や守らせたまひけん。吉次を。逆巻浪を物ともせず。騎人は達者。馬は逸物に。人と馬と力を戮して。舷近く乘つけたり。實政は。嚮よりこの形勢を見て。大に殆み。あれ吉次を助よとて。船をとらへさせんと下知するに。軍兵夥うち乘たる大船を。速に漕かへすべくもあらねば。終に思ふにはかりし得ず。看々可惜壮夫を殺すことよと。呟きたるに。吉次辛じて乘着しかば。ゆかく歡び。軈て人馬ともに。船に扶のぼさし。信やかに勦れば。吉次は。執權へ。身の暇を申せし間に。思ひの外後れたるよしと述れば。實政聞て。しからば其許の懈れるにはあらず。目今の爲体と見るに。盛綱が藤戸を渡せしに勝れり。船出はこの黄昏過にと定たるに。潮と風との便宜あれ

ば。久しく待あはすることを得ざりし。こゝろもて心の外に。大に其許を勞せしとて。他事なきさまに聞えけり。されば浦曲なりける見物の良賤も。吉次が大洋を渡せし状。稱どよめきて。おのが家路に立かへりきぬ。吉次が從卒等は。海を渡すによしなければ。陸地より西國へ赴き。秋布主從は。石切山より吉次が船に乘得たると見て。やうやくに心おちゐたれど。船は跡なくなりゆくまで。秋布いとゞこゝろぼそくて。村澤俊平にいへりけるは。ものにはかならず因縁あり。己が身はこの石切山なる望夫石のほとりにて生れ。良人は又松浦なる鏡の神社の祈子なりとぞ。さればにや。今宵の景迹を。唐山の望夫石。吾國の領巾麾山の俤に似て。己が悲しみは。いにしへの松浦佐用媛にも勝るべし。會者定離とは云ながら。會ことかたくして。別るゝに易きは浮世なりけりとて。聲を惜まずよゝと泣ば。俊平これを慰めてさま〴に云こしらへ。やがて麓へ下りける。

第七　海濱に書を失ひ書を得たり

秋布は。夫吉次が西國へ赴きてより。既に五六十日を經されども。絶て一度も音耗なく冬も

俊平齋書
記入西

さや半を過て。長き終夜いも寝られず。まどろまぬ暁に。入る月を詠めては。鎮西の方なつかしく。つく〴〵と孤燈に對ひては。吾影ならで友もなく。只管に思ひほそりしかば。父の彌四郎これを見て最こゝろもとなくおぼえ。毎日に若黨關簑七を遣はして。その安否を問せけり。この簑七を。秋布が幼き時より守傅きたるものなれば。俊平よりは。心くはなく思ふから。秋布は彼が来る毎に。夫の事のみいひ出て。不覺に落涙したりければ。簑七は其心中を推量り。かくまでにおもひくし給ひて。不慮の事あらばいかにせん。僕潛に父上に聞えあげ。近きに西國へ赴くべし。消息なんどは。豫て寫めおき賜へかしと。信だちて聞ゆるにぞ。秋布斜ならず歡びて。そなた彼地に赴きて。面あたり己が夫の安否を問はゞ。これにます心やりはあらじ。父の氣色よろしき折を窺ひ。申しこしらへてたべといふに。簑七はこゝろ得果て立かへり。其夕主君彌四郎に。件の事を告ふければ。彌四郎もさすがに恩愛のやるかたなく。余りに女兒が思ひ細りて。長き病着に臥もやするとて。心安からざる折なれば。今簑七が西國へ行んといふを聞て。竊に歡び。私に戰場へ消息をいたす事。我なりては許がたし。もし汝が心ひとつにて行んとならば。我はしらずがほにてあるべし。と回答しかば。簑七畏てその夜又瀬川が宿所に赴き。秋布に彌四郎が云しことを聞えしらし。かゝれば翌を勉めて旅立候べし。書簡など寫めおき給はゞ。目今遞與給へと云に。秋布大に歡びて。豫て便あらば送らんとて。毎夜に手づから織たりし。錦一巻と十尋にも餘るべく見ゆる。書簡一封をとり出し。又口づから云べき事を。叮嚀に云しらし。又一封の金と。一裹の丸薬をとり出して。これとば簑七に餞別し。そなた今ゆきて。いつの程にか歸り来べきと問ば。簑七しばし僂へて。今茲もなほ四五十日はあれど。路遙なれば。年の内にも覺つかなし。正月の上旬には。必ず歸り候べしと。回答えて。書簡と錦を受とり。金と薬と給はりて。軈て宿所に走りかへり。俄頃に行装を整つゝ。八聲の鶏ともろともに。西をさして立出ぬ。こゝに又鼠川嘉二郎武行。長城野兵太敦宗は。去年の冬鎌倉を追放れ。些の貯祿を命綱にして。伊豆の山中に躱れ住み。嘉二郎が奴隷勘八を。とり〲潜やかに鎌倉へ遣して。事の為体を窺せ。瀬川采女が秋布を娶りし事。又今度實政に從ひて。彼人西國へ赴きたるよしを傳へ聞て。嘉二郎はい

俊平遭賊失秋布之書、

時宗拾秋布之書

きたるものにこそ。御身今度の厄難にて人の物を捨給へども。命を拾ひ給ひしかば。これにます僥倖はなし。立歸りて。縁由を告給はゞ。その主もいかでか恨給ふべき。といひ慰めて。やがて外面へ出にけり。こゝに于て簑七は。又一層の劬勞をまして。ふたゝび思ひめぐらすに。これ今錦と書簡は失ひては。往ても還りてもいひ譯なし。しかなれど。今はからずも。嘉二郎が手形を得て。主君の大事としるうへは。一日も躊躇しがたし。金瘡全く癒ずとも。まづ鎌倉へ立歸りて。主君へこの手形とや見せまゐらせん。又西國へ赴きて。婿君へや告申さんと。とさまかうさま思ひ煩ふ程に。瘡口ふたゝび壊て。苦痛はじめに彌ましければ。又いたづらに日を過しぬ。

第八　錦繡の和歌邊將を召

今茲も既に暮て。あらたまの春立かへり。鎌倉には。執權時宗朝臣。太宰の經高誅伐の祈願として。博多倍太郎以下の近臣を召倶し。榎嶋辨財天へ參詣ありて。七里が濱を歸り來給ふに。海士の子どもかと見えて。年の程十二三才なる男の童二人。油紙に裹たる。行裹とおぼしきものを引あひつゝ。こは己がものよ。いなおのれこそ。はじめに見出したれば。こなたへ遞與せとて。罵り爭ふを。時宗遙に見そなはして。しばし馬の手綱を扣。博多倍太郎をもて。二人の童を近く呼して。その故を問給ふに。童どもは。執權なりと見奉りて。大に畏り。はか〲しくは回答申さゞるを。時宗みづから叮嚀にいひ諭して。問たまへば。彼等やうやくにまうすやう。目今彼首の磯にて。貝を拾ひて候に。はからずもこの行裹が浪に打よせられて。ほとり近う來りしを。おのれ先に見出し。彼後に取あげされば。こなたへ遞與せ。遞與さじとて。いひ爭ひさるにて候。と申せしかば。時宗件の行裹を召よして見給ふに。細き麻糸もて。縱横にかゞりたるが。小き木札をつけて。肥前國矢田津の陣中。東軍の軍監。瀨川釆女ぬしへ寄奉る。拙婦秋布とありければ。時宗やがて。この行裹を博多倍太郎に預たまひて。童に宣ふやう。途に遺たるものなりとも。私に拾ふ事かは。それを私に拾ひて。己が物とするは罪いとふかし。汝等は童なれば。わきまへずもあるべし。この後もかゝる事あらば。村長に申せよ。彼行裹を。その主の姓名を記してあれば。こなたより返しつかはしてん。けふは許すに

とく行ねと仰られば。童どもはいよ〳〵畏て鼠の迯るがごとくに走り去りぬ。かくて時宗朝臣は。館に歸りたまふと。やがて博多倍太郎に。行裹を解ひらかして。見給ふに内には秋布が夫へ贈る書簡一封と。錦一巻あり〳〵潮垂たると。しづかに乾さして。まづその書簡を讀し給ふに。文章の雅たるはいふもさらなり。離別の悲みと述ては。山鷄影遠くして。鏡と分の恨と記し。獨居の懶を舒ては。蝙蝠聲なうして。扇に題するの例をいへり。その辭悽惋としてものがなしく。その情親切にして艶ならず。これを聽もの落涙せざるはなし。時宗又かの錦と見給ふに。尋常の織ざまにはあらずして。百首の和歌を織なしたるが。その綾の巧なる。その歌の妙なる。すべて人の及ざるところなれば。時宗頻に感心あつて博多倍太郎に宣ひけるは。むかし異域唐の會昌年中に。邊將張揺が妻の侯氏は。夫が任にあることの久しきを歎き。回文を繍して。龜形の詩を作る。又晋の竇滔が妻蕙若蘭は。文旋圖の詩を錦に織入まく。夫が秦州にあるに贈まり。今の秋布は。我が邦の若蘭。侯氏といふべし。渠吉次に齊眉こと僅に七日。忽地に別まくより。夫は生死の堺にあり。再會の量がたきを悲むことい

と不便に。ゑやう吉次と召かへして。秋布がこゝろを安んじ得させんには。と宣へば。倍太郎答まうしやう。仁君上に在せ。彼等が身にしては。莫大の恩恵不思議の僥倖なり。しかれどもこの事によつて。吉次を召還さんと仰なば。秋布が父彌四郎は。恩愛に溺まく。忠義と缺ものにあらねば。世の譏をおもひ。婿の思はんところと羞て固辭まうしべき歟。又秋布も貞操ある女子なれば。却て心うく思ひ候べし。よしや彼親子のその固辭申さずとも吉次もしその妻の戀慕によつて。召かへさるゝとありながら。いかでか阿容〳〵と立歸り候べき。歸るときは世の胡慮となり。歸らざれば君の命に違はん事と恐れ。忽地に討死いたすべうもやあらん。世言に心あつて花を栽れば花活ず。意なくして柳を挿ば。よく蔭といふことあり。得と賢慮をめぐらし給へかしと。憚る氣色もなくまうせしかば。時宗朝臣かさねて宣ふやう。汝が申すところ甚理りに稱へり。しかはあれ。東軍數千騎の中より。吉次只一人と召かへすは。九牛が一毛なり。一將は得がたしといへども。實政の軍配に干て。おぼつかなき所なし。且秋布は。己が母の愛たきものにおぼされ。しかるに彼女子。哀慕に堪ずして世を去ること

B 23475

松浦佐用媛石魂録前編下巻

東都　曲亭馬琴　編次

第九　龍神洞に孤客命を知る

太宰府の守護。平經高が股肱の家隷に。牛淵九郎清縄と云ものありけり。原是何等の人なりと。其素姓を尋ぬるに。父は岬平馬清廉とて。三浦泰村が譜代の郎黨。忠義無二の者なりし。然るに泰村は。後深艸帝の御宇。寶治の始め。北條一家の威權を猜み。謀反の企ありしころ。清廉屢々主を諫め。終に用ひられず。却出仕を留められしかバ。平馬は痛くこれを歎き。忠臣面を犯して。君を諫るに。其言用ひられず。縱眼睛を東門に掛るとも。又何の益かあらん。只身を殺して。君がミづからなせる禍を禳ひ除んのみ。と深念し。一封の遺書を寫留め。腹かき切て死にけり。清廉が死後に。彼遺書を披露すと雖も。泰村終に逆意を思ひ留まる氣色なし。さらハあれ。其鯁忠を憐ミけん。清廉がぬさりの子どもを扶助し。恩惠頗厚かり

しを聞へあぐるに。經高は。牛渕九郎が来れり。と聞て大に歡び。已りなく城中に留る事三日。さま〴〵に饗應さし。老臣更る〴〵に。利害を說き、まげて守護の渴望に應じ給へ。斯てもなほ推辭給はゞ。生涯此城中より外へ。出さじと云に。清繩は斯叮寧なるに心よはく覺え。已ことを得ず。しぶ〳〵に。主君と頼み奉るべしと應たり。さる程に經高は。牛渕を後廳に呼び入れて對面し。見參の引出物として。鎧一領太刀一振。鞍おきたる馬一疋を賜て。てづから盃をあげ。饗應初めに彌增たり、其時清繩は。よく〳〵と經高が相をするに。謀反の氣あらはれて。なかなか事を遂べき人にあらざれば。意の中大に驚て。只管後悔したりしかど既に其招きに應じて。言下に是を違背せば。忽地に罪せらるゝのみならず。死後なほ胡應なるべしこれ思はずも。范增と恨を等くする事よ。と嗟嘆して。命運の係る所。今はかうと思ひ諦め。遂に志を傾て仕しが。經高果して。いく程もなく謀反を起し。清繩をもて軍師とす。されば清繩は。機に臨。變に應じ。屢々謀を述るに。經高は。其人となり。識量挾く。人が疑て決斷なされば。其謀を用ひず。清繩大に焦燥て。手勢僅に二三百人を將て。肥後國に押渡り。菊池原田を攻

清繩欲刺
實政不果

靡し。肥前の飛蘭渡に屯して。勢ひ九州に振へり。然るに。北條上總介實政。執權時宗朝臣の命を稟て。鎌倉を進發し。船路より肥前國に赴きて。矢田の津に陣を布。直に清繩を討んとす。清繩緣由を聞て。實政の軍配。侮難く思ひしかば。佻々しく進て戰ず。兩陣巨海を隔つゝ。疾視あふて徒に日を過し。はや其年も暮て。新玉の春立かへりにけれど。寒さ冴まさりて。雪降續きされば。敵も身方も最徒然に堪ず。此時瀨川釆女吉次は。大將實政に密語ていへりけるは。仄聞牛渕九郎清繩は。不測に間諜の術を得たりとなん。彼去年より一たびも寄せ来ざるは。必定別に謀あるなるべし。常言に。笆外の犬はなほ防べし。壁隙の風は禦がたしといへり。牛渕倘潛入て不虞の事あらば。臍を噬とも及ばじ。大將には。今宵より某と臥房を換て睡給へかし。幸に子密が便室の禍を脫れ給ふべきものをと。信だちていふ。實政聞てしばし尋思し。示さるゝ所理あれど。初め傭をうくるものから。なほ不仁なりといはむや。然るをわが身の厄難を避んとて。人を危きに代する事は。勇士のせざる所なり。と回答て。承引氣色なかりしかば。吉次重ねて。然らば近曾陣中に。罪ある者の死刑を放し。是

きさるまゝ仰さまに引外して。頭巾を吉次が手に残り。清縄ははや。鹿垣に走り登れば吉次大に焦燥て。太刀に著たる小刀を脱出し。追ひつゝ丁と打かくると清縄を物ともせずして。是を袖に受留。やとら垣を踏こえて脱れ出たり。こ乃胖響に宿寝乃壮士。番次乃兵士。驚き騒て。手に〱器械をとつて。追蒐んと閙くと。吉次見かへりて牛淵とば。われ追留て撃とるべし。おの〱ははやく路を斷ふさぎて。這奴を飛蘭渡へ歸さぬやうに。手配なし給へといひらけて。角門を押開き。飛が如くに追てゆく。大將實政縁由を聞て。豫て謀つる事なれば。俄頃に軍兵を三手にわけ。其一手は。清縄が歸るべき路を遮り留さし。又一手の兵士は殘し留めて。陣中を守らし。殘る一手の軍兵を將て直に飛蘭渡へ押わたり清縄が陣を攻破り其屯を拔んとて。馬に閃りとうち跨。鞭を鳴らし。深雪を踏し。揉に揉で走出れば。主に劣らぬ壮士ども。みな後れじと引添たり。斯て瀬川采女吉次は。頻りに牛淵清縄を追蒐て。やゝ間近くなる程に。牛淵は疎林の中へ走り入りて。忽地見へずなりしかば。吉次ます〱焦燥て雪に印たる足迹を標にし。なほ何處までもと追蒐たり。さても牛淵九郎清縄は。輙く實政を撃とりぬ。と思ひしかば。敢戰を好まず足に信して脱走り。あまりに烈しく追れしかど。彼を遣過さむやと思ひて。道もなき山路に向ひて。徒に足跡を殘し。逡巡して立戻り。道を横さまに。徑にかゝる。踏たる雪を搔埋めつゝ、漸くに吉次を出し拔て。直に飛蘭渡へ歸らんとするに。實政の軍兵。ゆく先に充滿て。遂に歸る事を得ず。夜はほの〲と明わたりて。沖の方を佶と見れば。飛蘭渡の陣も。はや攻落されぬとおぼしくて水鳥夥。こなたを指して飛来るにぞ。清縄大に疑惑ひ。躊躇して思ふやう。實政の軍監に。瀬川采女吉次と呼るゝものは。年弱けれど。智囊尋常に非ず。軍慮孫呉を學ぶと聞しが。果して敵に備あり。もし大將實政を撃れたらば。陣中以の外に騒動すべきに。却わが歸る路を遮り留め。主將のなきと知て。飛蘭渡を攻落したる軍配甚奇なり。然れば此首も。實政にはあらで。贋物にありけるかとて。はか〱見るに。枯首なれど。其骨相匹夫の面影にあらで。大將の首級に非ず。さては謀策られたる口をしさよ。とひとりごちて。蹉すれども其かひなし。こゝに至つて。いよ〱龍神の教誡露ばかりも錯ざると感嘆し。嗚呼われこゝに死んか。といつて。拿たる首を雪中に撲地と投

東京金玉出版社

吉次會王嗚ゝ自殺、清縄梭首、鎌倉ノ使召吉次、

捨。又道とつてかへし。末の龍華の方へ走りけり

第十 末龍華に親族全く聚る

明ければ正月廿九日の早天に。北條上總介實政は。瀬川采女が謀によつて。牛淵が飛蘭渡の屯を撃崩し討とる所の首級を斫梟。さて暗号の烽火をもて。矢田の身方へ知しけり。かかりしかば瀬川吉次は。清縄が陣。既に破れたるを知て。いよ〳〵勇みたち。頻に牛淵を追詰て討とらんとて。なほ彼此と徘徊するに。野も山も白妙の深雪の外に物もなく。斥て行方も覺束なくて。不意も末の龍華に迷ひ出たり。通宵走りたるに。痛く饑て寒堪難ければ。道次なる草舍に立寄て。斜なる片折戸をほと〳〵と打敲に。裡より老女の聲して。誰と問。吉次答へて。是は深雪に道を迷ひて。饑に臨る者なり。しばし憩して。一碗の粮を惠み給へ。翌は必らず厚く報ひすべきにと云を。件の老女聞もあへず。呵々とうち笑ひ。あな己が子。えや歸りたる歟。いつまで童めきたる正な事して老たる親を誑かして遊ぶか。疾々裡に入れかし。と云に。吉次は。其心を得ず否これは。近曽東より来れる者なり。そなたこそ。正な事はいへ。これいかで人を誑くべき。と呟けば。老女はます〳〵うち笑ひて。汝は叔父に勸んとて。酒を買に出たるが。人にも進で。まづ痛く醉たるよ。あな鈍ましや。年来耳なれたる己が子の聲を聞惧つものかは。開よとならば。などて明白には聞えざる。此雪に寒けくはなき歟。嗚呼の白徒かなといひ懲らしつつ。荒たる庭に搔捨たる。雪の中道を。木履穿しめて。歩み出。やをら折戸を開かけて。吉次をと見かう見つ。怪しや聲も面影も。紛ふべくもあらぬ己が子なれど。身には腹巻をし。小手臑當しつる。武者態の最勇さよ。此曉に。飛蘭渡に戰ありと聞たるが。落武者の物具を剝とりてや来たる。心ある人は。道に遺たるさへ拾はぬぞ。然るを彼人の從卒と知ながら。引剝するは。即ち獸の心なり。とくもてゆきて。其主へ返さずば得こそ裡へは入まじと。涙さしぐみ怨ずれば。吉次ます〳〵呆果。こは狂人なりと猜して爭ず。微笑て云やう。老女聞け。世には似たる人影あり。神の代にしては。天稚日子の。阿遲志貴の神に似たる人の代にしては。武内宿禰乃。壹岐直に似たるあるは。孔子乃陽虎に似たる。何尚之と顔延之が猴に似たる。他人乃猴似と云も是より出たり。これは誰に似たるかは知ねど。東軍乃軍監に。瀬川

張仲階が妻の故事は伊万里の段に至りてつぶさに云べし

浦次郎訪根塚其実吉次也、

し。旅宿へとてぞ歸りける是迄では前集なる第十回の結局なれば。世の人の知る所なれども。既に居多の歳月を歴て。今後集を續出せバ。只末を視て本を得しらず。思ひ惑へる人しもあらん歟。よりて遺忘に備ん為に彼崖略を擧るのミ。前説休題。有然程に瀬川釆女吉次は。弟浦二郎と相計て。次の日母の亡骸と外叔父清縄が。亡骸をも櫃に斂めて。程遠からぬ菩提所なる。山寺に葬る程に。里人等も是を資けて。柩を送る者多かり。そが中に日ごろ親しき揃と雖も。動すれバ。吉次と浦二郎と認違て。應答不都合なるものから。縁由を稍聞知りて。駭嘆せざるはなかりけり。宜なるかな瀬川釆女と。浦二郎は双児にて。其相貌の肖たるは更也。物のいひざまは。進止。咳逆くまでも孰と兄。孰と弟と己き難けれバ。彼張仲階が妻のミかは。母玉嶋すら初對面に。吉次と認て浦二郎ぞと。思ひ違へしは疎忽に似て疎忽には非ざりき。と思ふも甲斐なき胞兄弟は。過去かさと胸にのミ。偲ぶに餘る袖の露。檐下の垂氷凍解て。荒たる籬笆に咲く梅の。世は春ながら春ならぬ。憂身は衰れ淡雪の。消るに早き庭面を。見つゝ思へバ會者定離。人世無常迅速の。理りを觀じては。家廚籠の看經も。果敢なき香の烟より。

立としもなき日數歴て。えや初七日になりにけり。かゝりし程に浦二郎は。叔父清縄が云々と。説遺しさる綷の趣。此度吉次が歸路の危難を拯ふべき計策。箇様々々と聶くと。吉次聞て頭をうち掉て。己れも亦牛淵ぬしの。臨終にいはれし事。彼八の弓人どもて。代よとある謎々を。和殿の註をまさで解さり。そは其意と問れん歟。八の弓人と合すれバ。是弟といふ文字に非ずや。和殿と己れは面影の。己きがさきまでよく肖さり。かゝれバ此度和殿ともて。己が身の如く打扮して。鎌倉へ遣すとも。誰か吉次ならぞと思はん。其禍に遭ふに及びて。和殿は其處に命を隕し。己が身は獨恙なくとも。弟を殺して何にせん。禍あると豫て知バ。思ひの儘に用心して。脱れ難くバ天命に。任をると是勇士の本意とを。彼識は一切従ひ難しと云と浦二郎聞あへぞ。宣ふ趣理りなれども。吾儕の思ふよしと違へり既におん身を主君あり且經高征伐の。軍監として功なきに非ぞ。然るを未然の禍と。知りつゝ命を失ひ給はぶ。其身に損あるのミならで。鎌倉殿の武威を隕さん。これ大なる不忠にあらぞや。某は又これと異え。家に事ふべき親もなく。國に使るべき君もなし。死して損なく。生て益なし且亡

母の夜話に。豫てより聞ることあり。昔己が同胞の生れしと丸。鏡の宮の神の示現に。兄弟其性怜悧して。なからも其才長されども。兄弟壮年にして厄難あらん。弟は母に養せよと。託宣ありしよしと思へば。只己が家兄のみならず某。にも亦脱れ難丸。禍のあるなるべし。かゝれば代るは代るに非ず。枉て此議に從ひ給へ。と辭を盡して諫しかば。吉次霎時沈吟じて。いはるゝよしも黙止難し。さらえあれども今さらに。和殿に己が身の打扮さして。鎌倉へ遣さば。是唯君を欺くこと。所詮同胞同船して鎌倉へ歸るべし。とは思へども卒爾こ。再三再四尋思して。絆の便宜に從ん。さのみな。急ぎ給ひそ。と云に否ともいひかねし。浦二郎も亦うち按じて。斯迄に宣ふ事の。目今規定せらるゝならねば。猶處分を俟んのみ。就て聊情願あり。亡母の世に在せし時。媒妁ありて己が爲に婚姻を結びしを。當國彼杵郡なる。伊萬里の庄の郷士にて。根塚氏の獨女。荻萩と云妙こ。只結髪しのみにして。未だ迎も取らざるよしは件の舅根塚氏。去歳の比より足痛の持病起りて行歩協はず。徒に日を過せども既にして秦晉の好を結びし事にしあれば。母乃身まかり給ひし事も。又某も鎌倉へ。赴くよしと彼人ぐ々に。報知せざれば恨られん。己が兄怙恃の憂によりて。發足延引なし給ふよしは。博多氏より鎌倉へ。既に注進せられしならん。然らば某伊萬里に到りて。立歸り來る程の逗留は猶許され給はん。然りとても其程の。心もとなく思ひ給はゞ。強て行んと云には非ず。御身の意見いかにぞや。と問れて吉次うち頷丸。そはよくこそ告られさる。寔に和殿のいへる如く。初七日になりされども。倍太郎より催促なきは。忌の闋ると待るゝものか歟。伊萬里はおこと鄰郡にて山河と隔し。旅ならねば。とくゆきて疾歸り給へと云に浦二郎歡びて。猛に旅乃准備としさる。其宵は同胞いもねられず。只行末と是彼と。語り曉して八聲の鷄と。共に塒と出てゆく。弟と送る別れ路の。あふよしもなくならんとは後にぞ思ひ合しける。有斯而其次の日に博多倍太郎が消息とて。奴隷使の齎し來つ。呼門高く名告をすれば。吉次手づから受取りて且その狀と披丸見るに最には慈母の柩送りと。果して後に參らんと。いはれし願事の黙止難く。實政朝臣に聞えあげて。既に七日の免許と得さり。かゝれば。けふより出仕して。職と急ぎ給へ。某事は只今發足。陸路を鎌倉へ馳歸て。此等乃よしと執權に聞えあげんと思ふ乃

吉次餞於
帰鎌倉其
實浦二郎也

吉次遭海賊姥口、其實浦二遭竜神也、

ずして遅滞の罪を。贖ふに足りぬべし。博多ハ今朝しも陸路を立ぬ。今更に遅々すべからず。軍船ハ湊にあり。何になりとも乗給へ。誘とく〳〵と急して。身の暇を賜しかバ。吉次一議に及ばずして。言受しつゝ思ふやう大将軍配慮に過て今百名の兵士もて。某を送らし給ふハ。必途に禍の。あるべきよしと知れし歟。もし不用意にしてこの議あらバ。それハ神佛の冥助ならんと。思へバ帰帆に勇みあり。欣然として辭し去りて。軈て湊口に赴く程に。彼百名の兵士等。一箇〳〵に名簿を捧げて。吉次が従者共侶に。一船にぞ乗たりける。此時矢田の陣中にて。手を負るもの病あるもの。吉次が船に附て。鎌倉へ帰らんとて。港口を指て来る者あれども。吉次一箇も是を許さず。もし便船を請ふ者ありて。竊に同船せしむるならバ。其罪是彼等しからんと。最も緊しく徇知して。皆悉追返せしに年尚若き一箇の男いかにかしけん兵士等に。財物多く賄賂て。一箇便船せさしを。吉次も従者も知者絶てなかりけり。然る程に。其日順風なりければ。船ハ忽地岸を離れて。東を指て走らする。水主篙師の棹の歌に。波の皷を調添て。水鳥騒ぐ横日影。朝霞暮雲に入るかと怪む。奇巖孤松の最妙なる。磯打風に清韻暢ひて。巨鱗群飛ぶ盈虚潮。折々揚る漁舟の竿も。これ状慰るに似たりけり。目に視るもの珍しく。耳に聞くもこれ新にして。日和さへあるにうち續けバ斯て行と行程に。長門州大津郡。阿川の出崎なる。向の浦を離ること既にして八九里許。春の海面月さし升りて。白晝よりも猶明かりけるに。怪しむべし此船の。艫の方に人ありて。横笛を抜出し。清凉として吹遊む。餘韻四下に響わたり。吉次是をうち聞て。訝しやわが船にて斯迄笛を吹ん者。有としもおもほえず。誰にもあれ其者を。とく将て参れ。と下知すれバ。一箇の従者承りぬ。と應もあへず。苫推揚て。彼癖者を引立来つ。蓬廬に推居ける。折から隈なき月を燭に。吉次熟是を見るに。齢ハ十六七かと覺く。色白くして眉秀。唇赧く。眼光の。平人ならずと見えざりける。此是一個の美少年。膚にハ皂衣を被て。手に横笛をもてりけり。當下吉次勃然と聲高やかに。やとれ少年。われ西征の軍監として。兼て捕盗の命を禀たり。是により同船の士卒一百名と。わが従者の内ならぬ。矢田陣中の病者ごにも。便船を許さざりしに。汝甚麼なる便を得て。わが此船に附来れる。思ふに敵の間者ならん。明々地に首伏せよ。とくいハぞや。

荒川等欲

仰うけむり候ひぬ。今殿まハ教諭の儘ま。聞え上候ハん。暇申を。と身を起を。傳馬除上の木の葉武者。落支度をる似くまて僉動也〱と港口なる。船場ま集合ふて。出てゆく。船と遥ま目送りつ。歸る間も浪高かり。其順風ふ眞帆揚て。別々ふなりまけり是よりして吉次ハ。主従纔ま五六人。船いと輕くなりけれバ。走る事も亦速く。日毎に風のようをしろバ幾日もあらで攝津なる。尼が崎まで著ふける。是よりゆくても船ならバ。遠江灘七十里。春も。順風稀え。と豫て聞さる事しもあれバ。吉次ハ此湊より船を返して大和路より。東海道と下る程ふ。歸心漸く矢の如く。日ふ十餘里の道を走れバ。其如月の下旬ふ。はや駿河路も打過て。筥根の畑ふ宿とりつ。其宵孤燈を搔起して。書寫さる消息と。是最早か奴隷ふ齎して。案内の爲鎌倉なる。博多倍太郎が宿所へとて未明ふ立して遣しさる。此日よりしろ。道を急がを。静ふ筥根状打踰て。其薫昏ふ主従五人。袖志浦の波打際なる。松の樹間を彼此と辿るも長か眞砂路の。波ふ足をな取られそ。と聲とかけつゝゆく程ふ。天ハ俄頃ふ結陰る。海さへ黒みて暮初さり。不題去歳よりして。伊豆の山家ふ隱を住む。鼠川嘉二郎武行と。長城野兵太敦宗ハ。曩ふ

刺吉次于勤
磯、不知其
為浦二也、

博多彌四郎の。若黨鬮籤七が秋布の使として。西國へ赴くころ。途まて竊ふ擊捕れとて。譜第の奴隷勘八ま。功成て後恩賞と。宛行んと云一通の。手形と取らして遣せしま。其約束の日數經て俟どもく勘八が。信絶てなうりしかバ。兩人竊ま疑ひ怕れて勘八をもし爲損ぜし敷。毛と吹か疵と求めなバ。蟻の塔より堤崩れて。是田の伎倆發覺なバ。いかゞをせんと危みて。安か心のなきものうら。然とて爲出を事もなし。只勘八が弟なる。貫九郎といふ。小斷ハ。將軍惟康親王の。奴隷部屋ま歇り居て。部屋子とう呼るゝのを。奉公もせで鎌倉ま舊の儘まて在しうバ。是究竟と招かよせて。酒ハ飲せ物と飼ませ。なほさはぐふおしらへて彼地の間者ふもそけるふ。さる筋まハ惡功長て。脱落もなかものゝけれバ。瀬川が妻の秋布が。良人へ贈る一包の七里の濱へ流寄て。ゆくりなくも執權の。御目まとゞまりし縡の趣この故ふ吉次と召返さるゝ御使ま。博多倍太郎を西國へ。遣されさる機密の顚末。又博多彌四郎ハ。女兒の爲ふ。婿吉次が。凱陣と祈る願文ま。征箭二條と取添て。鶴岡へ納し事まで。大うさなうぬ捜課せて。縡云云と報しゐバ。嘉二郎兵太ハ雀躍して。再生さる心地なつ。秋布が

へ。瀬川吉次が枉死の事。鼠川嘉二郎長城野兵太が。夙怨の事れ一條をべては奴隷貫九郎が。首伏の趣ともて告まうせバ。時宗駭き且怒りて。彼嘉二郎兵太等ハ首を刎べき者共なりし拭。頼綱が面に顧て。其死を寛めて追拂ハせしが。恩を受て恩と思はず。私の怨をもて。愛臣瀬川吉次を。撃果せしこそ奇怪なれ。這奴等が惡吏ハそれのみならず。彼貫九郎とら云奴を。拷問せよと下知し給へバ。當職の有司。奉りて。貫九郎を獄舎より牽出し。背と割骨を挫ぎて。最嚴しく責さりければ。貫九郎ハ得堪ずして。嘉二郎ハ奴隷勘八ともて秋布が使關義七と。道中に殺させさる。其事乃始めより。其後貫九郎ともて問者として。吉次一家の事に預る。鎌倉中の風聲を聞定め。此度吉次が歸ると知りて。埋伏なさる縡の趣 其處に怨を復をに及びて。直に逐電せん爲に。竊に叔父の頼綱に。路費を乞し。密吏まで。其奸計十まして。八九と首伏しければ。時宗此よしと聞給ひて。今ハ其奴に所要なし。とて罪に行へとて。遂に頭を刎られけり。是により。内管領平左衛門尉頼綱も君邊猛に首尾歹ければ。引籠て居さりける。有然程に時宗朝臣ハ。經高誅伐の禱の爲。次の日鶴岡へ社參あり。屡

時額づき。頭を擡て。四下とつら〳〵視給ふに。素木の小四方に。征箭二條を打乗なて。願書めなさる一通あり。間近く侍坐しさる。社僧を見歸り指して。彼ハ近屬納しもの歟。願主ハ誰が。と問給へバ。社僧答て。さ候。曩に御内人博多彌四郎が。宿願の旨ありて。進らせさるにて候。と事もなげに申をまが。時宗さこそと領なて。軈て願書をとり卸さして讀しゝて是を聞給ふに。そが中の文言に。經高誅伏せずといふとも。吉次を速に。凱陣あらせ給へと寫せし。一條を聞咎めて。屢〳〵社僧に讀返させて。扨宣ふやう。我今思ふよしあれバ。願書をこなさへ遞與をべし。征箭ハ且く預け措ん。心得て歟。と云諭しつゝ。社壇を出て悠々と前驅後從の目覺しき。叱咤の聲松吹く音も。枝を鳴さぬ執權の。威風遲く鎌倉山。御館へ歸り給へども。疑心暗鬼を生ぜしより。とにかく思ひ安からねバ。次の日内管領頼綱の。咎を許し招な寄て。きのふ鶴岡へ社參の折。計らずも其意を知りさ故。博多彌四郎素延が願書を取出て指示し。抑經高西海に。跋扈してより既にえや。兩歳に及べども。元兇未だ誅に伏せず。是故に時宗を。魂を痛しめ。神に祈り佛に念じて。只逆賊の速に滅ん事を欲をれに。博多彌

博多の大人の横死は。仇と君との所行なれば。脱れ難きも理りなれど。後室さまは。おれと異也。嚮には憂に堪へかねて。自殺せんとし給ひしを。漸く諫め禁めしかども。猶死鬼に勾引れて。淵田に投じ給ひし歟。かくては頼む主もなし。速に追腹切て。恩義を泉下に報ぜんものをと思ひ決めつ坐を占て。既に刀に手をかけしが。忽地に思ひかへせば。主の仇人はなほ一箇皇土の内とよも去らじ。いかで鼠川嘉二郎を。撃果して後にこそ。死生を其處に定ん。と尋思をしつゝ果敢なくも。其日を漸く消しけり。然ば又。執權北條時宗朝臣は。博多素延を誅せしより。七八日を過る程に。一日内管領頼綱を召近づけて。予が年来瀬川吉次を。不便の者に思ひしは。渠が才を愛ればなり。さはにより嚢に經高征伐の。軍監に任ぜしかば其功なきにあらねども。這回博多彌四郎が不義の科は。其婿なる吉次に溺愛しさる。僻事によつてゝ。かゝれば亦吉次も。縁坐の科はいかでか脱れん。渠は既に歸府の道中。動の磯の邊にて。鼠川嘉二郎等に撃れしよし。其聞えありと雖も。妻子も愍むべき者ならず。通世帶と官籍して。追放すべし。と仰らる。頼綱はこれらのよしを。承るべしとは思はねども嘉二郎が吏に拘ひて。

大和若葉後編巻之二

我身も咎を被りし。先度に懲て遂に諫めず。承りぬと應つゝ。退き出んとする折から。近習の侍走り来て。鶴岡なる神主が。神勅の注進あり。聞し召るべうもや。と報るに時宗驚きて。神勅ならばいとも畏し。吾自らよしを聞ん。使者をおなさへ參せよ。と回答て文注所に出給へば。頼綱等以下の近臣。當坐に扈從なさりける。登時鶴岡の神主の使者。海邊甲。簀子の邊に蹲居しつ。頼綱に打對ひて。神主言上し奉る。一條の神敕あり。抑も兩三日已前より。當社時々鳴動せしかば。神官怕れて群議を凝らし。今朝しも卯の時の半より。十二座の神樂を奏して。神慮を清しめ奉りしに。今茲九才になりける行童に。神の祓らせ給ふと覺しく。踊揚りし。狂ふ事半時計。猛に妙音を發颺して。神官に告給はく。博多彌四郎素延は忠義素朴の者なりしを。鼠川嘉二郎が恨によつて。同類貫九郎と云一個の下司に素延が願書を竊略せて。長城野兵太に文を易さし。雖不の兩字を増加しかば。其意炭雪の違ひいで来て。素延無實の罪に死にき。素延が本文には。經高速に誅伏して。云云とありけるを。よくも思ひ回さで。罪なき者を害せしかば。神は怒り人は恨めり。然ると又吉次が妻子まら罪な

東京金玉出版社

はぞ。忠貞の道修く廢れて。寃を伸るに所なく。天災地妖屢々起りて。上下交危かるべし。先非を悔過を改めて。政道を正しくせずや。甚麼〳〵。と繰返しけるに。いと爽やかに告させ給へば。神官等或は駭き。或は畏て。時を移さず是等の由を。そが儘注進し奉れり。願ふは萬機寛容の。政こそあらまほしけれ。言上仍件の如し。と息吻あへぞ演るになん。時宗主従打駭きて。迭に目と目を注しつゝ。怕れて各々黙然たる。そが中に時宗朝臣は。小膝を礑と打鳴らして。謬るかな凡夫の裁斷。予も亦鼠川嘉二郎等に謀られて。良臣を害せし過失。神慮さこそ。と最も畏し。然れ共。當家の武運盡ずして。不測に神の咎あり。いかでか懺悔せざるべき。かゝれば瀬川吉次が。妻子追放の沙汰を止めて。宜く彼兩亡臣等が。後ぞいとよく憐むべし。平左衛門(頼綱)は予が名代に。速に社參して。幣帛を奉り。神責を謝し奉れ。予も明曉は參詣せん。使者もまづよく此意を得て。神官等に報知せよ。と辭せはしく下知しつゝ。身の暇を賜ふになん。使者は歡びて退き出。頼綱もろが儘に。走て宿所に退きつ。行水して身を清め。三歳駒に鞭ぞ鳴らして。鶴岡へ參詣し。迺幣帛を進らせて。主君懺悔の情態を

神明感應
秋布仲父
寛さ

黙禱してければ。行童は忽地鎮りて。衆皆安堵の思ひをなせり有如此程に時宗朝臣は。頃日家に籠居たる。博多倍太郎正延を召出して。八幡宮の神勅の。奇瑞の由を聞え給へば。正延は駭然と。且怕れ且歡びて。頻りに膝の進むを覺ず。時宗重ねて。吾吉次素延等が。家督の事を思へども。渠等に兒なきをいかゞはせん但吉次が妻秋布のみ。南殿にも愛させ給へぞ。宜く扶持し得さすべし。其餘の事は云云と。詳に聞へ知して。立んとせしを呼留め。汝再び彼處に到らば。よく秋布に此意を傳へよ。心得たる歟。と又繰返して。說示し給ふにぞ。正延いよ〳〵歡びて。えや御前を退出ける。瀬川が宿所へ赴きけり。案下某生再說。瀬川が若黨。村澤俊平は。秋布が往方を索ねて。夜も通宵いねられず。思ひ疲れて目睡々ん。其曉の夢の中に。それかと曉るよしあれば。兩三箇の奴隷を將て。未明に篏輿を舁しつゝ。鶴岡の社頭に到りて。籠堂をさし闖くに。秋布はいといたう。疲勞たる面色にて。荒筵の上になり。これ什麼いかに。と駭きて。まづ其故を諮るに。秋布は稍頭を擡て。いぬる夜たらはが告ぞして。こゝに籠りて在りしかば。然こそ便なく思はれけめ。嚮に和殿まいひつる如く。不幸の上に

不幸累し。家難は生才學に博士態さる己らはが科ぞと思ふに。此身の恨しく。自殺の覺期としされども。太く和殿に諌められて。志を得果さず。しかりとも父大人の冤枉を雪めずば。存命ふとも其甲斐なし。神佛未ざ棄給はずば。祈るに驗なからんや。と思ひ起しつ親良人の忌服の怕れは有ながら。迚も己が身を贄にして。死ぬるに憚ることやはある。鶴岡なる大神の。社頭に祈念を凝さんものをと。深念をしつゝ走り出て。かの宵よりして食を斷。己が親の枉冤は。當社に願書を奉りし其事よりして發りにければ。倘えからずして神罰を受べき罪を犯せし歟。然らずば親の枉冤を。解諦させ給へかし。それ將神の威徳にも。及ばせ給はぬものならば。秋布が露の命を。七日の間に取らせ給へと。丹精を凝らす程に。社壇折々鳴動して。神樂の行童に大神の被せ給ひし託宣あり。其故は如此くと。宮奴の罵騒ぐにぞ原来念願驗あり。空しからずと思ふにも。いと憑しく歡しく。いかで宿所へ歸らんとおもへども身は疲勞たり。往も得着かで道路に倒るゝ事のありもやせんと。己が身ながらに危みて。なほ躊躇て在なるに。さても和殿はいかにして。こゝに己らはがとるよしを。よく知りて索来つるかや。知らずば準備の轎子さへ。昇しては得来まじきに。是も不測の事にこそと云に俊平駭歎して。世をえや澆季に及ぶと雖も。月日は未ざ地に墜給はず。こゝにますく神國の。靈社の奇特顯れて。然る應驗を得させ給ふも。是深信の致す所。それにはあらで僕は。おん身の往方を索難る。此曉の夢心に。公然る一箇の老翁。枕方に立在て。汝は主の秋布が。往方をしらまく欲する歟。準備の蕃輿を齎して。とく鶴岡の社頭に赴き籠堂と闘へかし。遅くば。愆あらんぞ。と云歟と思へば夢覺たり。これは平事に非じとて。形の如くに計ひつ。竊に御迎に来て見れば。正夢にして果して違はず。豫ては憂に堪かねて。淵川にや投ミ給ひなん。縊れてや亡給ひし。と思ひにければ。こゝらをば。かけても索ざりけるにこそ將神の示現によれり。いと憑しく候。と告るに秋市彌感じて。齊一奇異の思ひをしつゝ。蕃輿に扶乗られて。潛びて宿所に歸りにければ。俊平は秋布に。藥を薦め粥を啜らせ。さまぐに勦る程に。通夜の疲勞の稍痊りて。心地清々しくなりにたり。浩處に諚使として。博多倍太郎正延。瀬川が宿所に来臨して。鶴岡の神勅。主君の恩命。素延は罪なきを。愆殺せ

秋布請復讐

實政归鎌倉、

して搦捕せんとこそ思ふなれ。かゝれば秋布は。萬里の逆旅に赴かねども。居ながらにして復讐の志を遂ん事。一兩年を過べからず。然れ共渠が願ひを聽ざらんも。亦勸懲に違ふに似たり。其義はこれよく尋思して。後日の沙汰に及ぶべし。如此心得よ。と示させ給へば。正延は唯々として。聽て宿所へ退出けり。有然程に秋布は。籠居を許されて。世間廣くなりしかば。日毎に香華院に參詣して。親と良人の菩提を吊ひ。且其墳墓を造作して。多くは佛事三昧に。長き春の日を消するものから。仇討の願事は。一日片時も忘るゝ事なく。折々博多正延に。御沙汰奈何。と催促を詰處に北條上總介實政。西國より凱陣のよし。豫て其聞えあり。遂に肆月の初めに及びて。實政鎌倉に還著して。時宗朝臣に見參を。此日在鎌倉の武士執權の家臣。御邸に聚合て賀祝の饗饌あり。就中實政は。御盃を賜りて。祝義の田樂を觀せしめらる。縡畢て時宗は。實政を近く招きて。軍のやうを問給ふに。實政荅申やう。早春注進仕りき。經高が軍師牛淵九郎は。飛蘭渡の砦に楯籠りしを。瀬川吉次が計策によりて。牛淵を欺引よせ。迺末の龍華にて。吉次是を撃捕訖ぬ。有然程に經高も。己が居城に引籠りて。勢ひ既に折けたり。某是を遠攻して。速には攻撃ず。いかにとなれば。經高飛蘭度の砦を抜れて。其翼を失へども。なほ千餘騎の賊兵あり。力戰に志あらんには。御方も士卒を多く撃れん。かゝれば敵の兵粮竭て。進退其處に谷る時に。一擧して經高を虜にせんと遠慮を廻らし。稲麻の如く圍せて。夜は篝火を燒曉し又折々鼓を鳴らして攻寇らんとする勢ひを敵に示して驚し。とさ〳〵其自滅を俟程に。一朝敵の城を遙に見るに早炊の烟竟に絶て。馬の嘶く聲もせず。原來敵は饑さめれ。疾攻破れ。と下知すれば。摠軍齊一閧と發りて早雄の若武者等。塹を渉し塀を乘踰。驀直に攻著て。えや二の城門まで打破るに。敵一人もあらざりけり。こは什麽。と衆人呆れて彼此と見かへるに。二の城門の東の方に。いと大きな脱穴あり。原來早脱穴を穿ちて。彼處より落亡たり。まづ其奥を極めよとて。一兩人を容れて見せしに。大約は廿餘町にして。遙に城の背なる。海邊に脱門あり。彼處は殊に切所ゝとて。戍の兵を措ざりければ。賊徒これをよく知りて。かう長やかなる脱穴を。幾日にか穿ちけん。こゝに慮ひの足らずして。捕逃せしこそ朽しけれ。疾其往方を索よとて。八方へ部して。軍兵多

秋布発程、俊平従駕

かくて其詰旦。博多倍太郎正延は。秋布主従と相具して。時刻を違へず参りしかば。時宗此よしと聞給ひて。文注所に御出あり。秋布と近く召れて。汝女流の非力をもて親良人の復讐と。願申を事神妙々。是により。仇討免許の御教書をなし下され。且盤纏の爲。金二百両を給ふもの々。從僕俊平と心と合し。仇人嘉二郎が所在を索て。討捕て歸參れ。今より其期を俟ぞろしと。叮寧に仰渡されて。御書と二百金を賜ひに々れば。秋布は歡しさに。只感涙に咽ぶのみ。世に有難き君恩の。謝びを聞えあげて。遠侍に退出々り。此時内管領頼綱は。秋布が若黨村澤俊平と。遠侍に召登して執權の仰を傳へ。汝主恩を思ふが故に秋布が仇討の。供に立んと願ふ事殊勝に思召るゝ々。百折千磨の艱苦にあふとも。今の志を移さずして主と佐て本意を遂よ。功によりて恩賞あらん。又一條。別に心得さすべき吏あり。逆臣平の經高は。城を棄遯竄して。今に往方定らならず。是により。國中に徇られて。追捕の御下知嚴重々。汝主従逆旅の間。倘經高が所在をしらば。はやく注進致すべし。則是吉次が生前の素懐に称ふ。莫大の忠節々。此事は餘吏なるをもて秋布には仰示されぞ。汝まづよく此意を得

て。秋布に達すべし。等閑にな承りそ。と繰返しつゝ云渡せば。俊平歡喜雀躍して。稟命を申を折。秋布は文注所より退きて。内管領に君恩の。歡びと述て主従共侶。君所をすべり出る時。正延は是と送りて。此日の首尾の辱きと祝ぎ。俊平は又頼綱に傳達せられし。經高追捕の御下知を。秋布にぞ告れける。有然程に秋布は宿所へ歸らんとして思ふやう。這年来南殿の（時宗の母公前集に見へたり）御慈愛と被りしに。いかで仇討恩免の歡びを申すべく。生死不定の旅にしあれば。見參して今生の辭別とも申さめどて。軈て南の御亭に参りつ。執達の女房に云云とまうしかば。南殿歡び給ひて。邊近く招して。不覺に涙ぐみながら。漸くに宣ふやう。吉次素延等が非命の事。最惜むに餘りあり親と良人と月の中に喪ひぬる你の哀悼。今更に云べくも非ぞ。さばれ孝烈の志を逞うして。仇討の義と聞えあげ。けふ御免を蒙りて。近日に首途をと聞けば。餘波惜さは限りも非ぞ。只速に夙志を遂て。歸り参ると俟んのみ。其日を何時と揣り難し。留別の見參なれば。寛やかに打相譚て。人とも身とも慰めよとて。御盃を給はりつ。是よりの後を只。四表八表の物語に。長き春の日もけふ

松浦佐用媛石魂録後編巻之三

東都　曲亭主人編次

第十五回　雞鳧と辨じて無名氏警を垂る

却説秋布主従は。不測に必死を免れて。六波羅の捕手の頭人。海原澳進と名告れる者の。組兵等に牽立られて。偏拾庵を出る折。主従齊一思ふやう。この海原澳進は。盗賊追捕を職としながら。賊情を察せずして。悪憎師弟と疑ふ事なく。還て俺們主従が。陳ずる由を聴ざりしは。彼虎よりも狼よりも。懼しと謂れん。酷吏にこそありつらめ。遮莫ゆくりなく。奸賊の毒手を脱れて。六波羅殿へ牽るゝ事。なほ切てもの幸なり。彼處で糾問せられん時。執權の御印ある。仇討免許の御教書を取出て武州に(時村をいふ)見せ奉らば。寃枉を釋るべし。爾りとも仇討の宿望をまだ遂ずして。鈍くも賊に謀られて。阿容々々と六波羅へ牽れしなんど。鎌倉までも聞なば。只主従の上のみならで。亡親良人の恥なりかし。左

東京帝國大學圖書
B 23475

随にして。それに違ふて疑れんは。愚昏なる所行に似たり。倘潔白を旨とせば。辭し去るに如者なし。然ばとて今更に。後室を打捨て。獨旅路に呻吟せまゐらするはいよ〳〵不義也。かゝれば己が主従は相別れんとするに離れ難し。天縁の致す所歟。情ある夫婦に相似たり。哀れ己れ男子と生れし生甲斐に。只此美人を妻とせば。百年の性命を。一歳に縮るとも惜むべき事にはあらねど。人おの〳〵過世ありて。主となり家僕となる果報は任せぬものにこそ。うたてかりける己が身やと果敢なき事さへ思ひ宿の。迷ひに胸を苦しめしと。漸醒て思ひかへせば。こは淺ましや己れながら。膽太くも主の後室に。懸念去つるは何事ぞ。總角の比よりして。主に仕て私なく。心ざしの正しきを。よく知られされバこそ。若き婦人に冊けて。仇討の供にそら。立せられたる己れなるに。妄想なりとも情慾に惑ふて不義の奴とならば。此両歳の艱難劬勞も。忽地泡沫と消ぬべし。己れには惡魔の身に憑ふて。狂するにやあらんずらん。曩に彼無名氏が。これを相して色慾を。誡めたるも所以あるらな。恐るべし慎むべし。と心で心を警めたる。これより後は情を禁め。慾を征する工夫をせばやと。思ひつゝ又睡りたり。間話休題。有然程に秋布主従は。其曉に浪速を立て。三四日とゆく程に。播磨と備前の封疆なる。大山嶺の麓に来にけり。比は十二月の下浣。樹杪の木葉落盡して。松柏の操を顯し。山川の流水半涸て。石背も渡に堪たり。山は雪の上に雪を積て。羊腸なる路絶ぬべく。里は萱の軒に萱を藏めて。燒火の儲優也。寒風肌膚を犯しては。遠碪の音も耳に留り。群雁水田に氷を摧く時。近村の堤も目に迥けし。一橋渡果て。亦一橋あり。一程行盡して。又一程長し鄙曲にいへる事あり。春は旅夏は温泉に送らまし。秋は野遊び冬はこもり居。旅中の艱苦いづれはあれど。玄冬の寒けき朝。陽光の短き時。萬里の路をゆかん事。壯夫もなほ病るに。况嬋娟たる一婦女子の。霜を載き雪を犯して。心ほくしのあなたなる肥の州遠くゆく程に。大山嶺の麓路にて。秋布は舊病の猛に發りて堪ぬばかりに。痞に胸を苦めらるゝ。嶮の難義に俊平は。枯尾花を折布せて。さはぐ〳〵に勦るに。こゝは人家遥にして。農夫旅客の過るも稀なる山脚の曠野なりければ。いとゞせん術なきものから。懷にしたりける。丸藥を掻探り出して。疾用ひんとしつれども。齒を切て受くべうも非ず。湯を乞んに

輪栗詐謀

し旅宿にゆくりなく。病著にさへ臥し給ふは。心苦しき限にこそ。とて癡らせ給へかし。と思へば只何となく。憐む心頻にまして。常にも見つる後室ながら其容止の美しきと。いと惜む心もつきぬ。折から甲夜に輪栗婆々が。戯けき問を語りせしを。聞捨て臥房に入りしが。寝られぬ儘に倩思へば。長き旅宿に男女の主従。貞操忠義に造りなしさる。膽魂とは人知らで。大かたは輪栗が如く。疑ふものゝ多からめ。かゝれば是瓜田の履。李下の冠。思はざりける疑似にあへるも亦主従の不幸にこそと。果敢なき事と思ひつゞけて。寝るども去らで目睡さる。夢とはいへど世にあるまじき。主に逼りて贖。命を隕させまゐらせしは。わが心の汚穢し歟。告ねば人は知らじといふとも。いかでかはわが心に。恥なき事を得ざるべき。身の暇を乞ひ。辭し去て。潔くせまほしけれども。今にしては其事かなはじ。宿志を遂させ給ふ折。此暁の悪夢を告て。懺悔して法師にならん。是より外にすべなし。と肚に問ひ腹に荅て。深念の臍を固めしが。是より後は初にも。優て謹慎を宗としつ。よく秋布に仕へたり。却説又其年は暮て。春も花月の初浣になりつ。假染ながら浪速津に。二とせの春を迎へて。鎌倉を出

しより既に三稔になりにけり。かくては又何の日に仇人嘉二郎に環あふて。宿志を遂ん。と秋布が。只管に焦燥て。病むがうへなる苦とませしと。俊平も慰めかねて。なほ療養に心を盡すに。如此〳〵の處には名醫ありと聞えしかば。俊平は人を走らして。件の醫師を招きたり。當下醫師は秋布が。脈を胗ひ退きて。俊平に囁くやう。婦人の病痾は難治の症也。しかれども一方あり。用ひ給はゞ必愈ん。只一個の藥剤と欸のみ。此藥剤は病家にあらん。さればれ旅泊の事なれば。携給ふや否と知らず。と云に俊平膝を進めて。それいかなる物にや。とせわしく問へば醫師答へて。得難き物には候はず。病人の臍蒂こそ。この一種を加味する時に。餘藥も共に功驗あり。携給はゞ幸ひならん。と云に俊平歡びて。走て病牀に到りて。秋布に如此〳〵。と醫師のいへるよしを報るに。秋布も亦歡びて。現わらはが臍帶は今も枕の邊とはなさぬ。護身嚢の中にあり用ひられなば出し給へ。と云に俊平遽しく。舊の一室に退き来て。醫師に又云云。といへば醫師は領きて。然らば病痾は愈しつべし。某今湯剤一貼を調合せん。此一貼に。清淨水三碗をもて。半碗に煎じ用ふべし。初は先武火ともつてし。中

松浦佐用媛石魂録後編巻之四

東都　曲亭主人編次

第十七回　再厄僮に釋て舊僕に遇ふ

輪栗婆々が獨兒なる。相肩棒太と呼ばれしハ。酒を貪り賭博を嗜て。奸智に長たる惡棍なるに。母の輪栗も頑嚚にて。竊疾さへ有ものなれバ。親子折々謀合して。よからぬ伎倆をせる事多かりき。さるにより輪栗婆々ハ。いぬる日に俊平が。秋布の護身嚢を。庖湢の柱に掛忘れしを。逸早く偷拿て。己が宿所へ竊遣せしを。棒太ハ裏面に金もやあると。思へバ聽て披ひら見るに。秋布が親良人の。戒名俗名を記せし楮牌と。秋布が生れし時の。年月日時地名さへ具に記しつけたるあり。聊文字を知りされバ。汲々と之を見て。彼秋布と云女旅人ハ。儔罕なる美婦人にて。齡も廿に足らずと聞ぞ。渠を欺詐りて引出し。售らバ夥の金になるべし。さバれ彼俊平とか云奴が。必苛く崇らんと。欲する事のなからずやハ。其折ハ

東京帝國大學圖書印
B 23475

しは。心の轉輾せし故ゑ。鈍ましやいかにせん。と聲戦して悔歎くを。俊平は聞あへず。然らば某走り行て。索取て追著まつらん。まづえや船場へ赴き給へ。といひつゝ走り去らんとするを。養七急に掖留めて。今はえや時も移りしを。虚々と彼處に至らば。莊客們に怪しめられて。還り来る事難かるべし。村澤氏は三稔以来。仇討の供に立ながら。末一段にして後室さまの。助太刀をせずもならば。寔に本意なき事なるべし。某聊思ふよしあり。獨彼處へ立かへりて。御教書を索ぬべし。しからば早くて一旬あまり。遲くとも三四十日には。此身の安危定りなん。縦解尸人に召るゝとも。御教書は恙なく。とり復してまゐらせん。とく〳〵船場へ赴き給へ。と云を俊平聽ずして。言果べうも非ざれば。秋布漸く推鎮めて。わらはが遺せし物なれば。わらはこそ行べけれども。大望あれば思ふに任せず。譬ば行も留るも。忠義に異なる事はなけれども。養七は俊平より。齢も倍て五十に近かり。俗にいふ處分盛なれば。ともかくもいひ諍て。命に及ぶ事はあらじ。と思ふはわらはが僻事にや。と云に養七歡びて。後室さまの仰こそ。愚案に稱ひ候なれ。しからば別れ奉らん。と行まくするを俊平は。今霎時と掖留て。理り逼ていはるゝを。今更推辭べくもあらねど。願ふは命恙なく。遠からずして追著給へ。旗津の港口で俟んぞ。と云を養七聞捨て。悍く勇めど主從が。生死不定の辭別。了得ぬ心よその月。なほ再會をまつ浦なる。鏡の宮歟影曇る。空と恨みて目送りけり

第十八回

假を認て真と做も必因あり

却説秋布は。俊平に扶掖れて。其夜更闌さる比。西の船場に赴きて。其曉に西國船の。旗津へ歸るに便船して。早く浪速と離れつゝ。朝な夕なに浪に揺られ。風に接れて行程に。折から順帆稀なりければ。是首の港口彼首の入江に。五六日づゝ。船歇りして。思ふにも似ぬ日を彌るに。主從徒然に堪ざれば。只養七が事をのみ。いかに〳〵と潜びやるに。いひ出ぬ日とてもなく。仇人にあはん歡びと。此哀みに春の日も。遠山の蒼々さると。波の花のみ眺めくらしつ。舟行ながらに夏は来て。肆月も中澣なりける比。一日又風わろしとて。長門州大津郡。阿川の港口に歇りぬ。三四日を過さずば。此風は吹かはらじ。と篙師等の罵るに。同船の

秋布遭乞兒、乞兒者浦二也、

行て再び来つる間に。忽然として失せけれ。三稔姿をあらはして。俺們を俟よしありけん。寃鬼など云者にはあらぬ歟。倘果してしからんには。我が夫の亡魂の。おのれにまみえんとて。久しく顕れ給ひし歟。見れども知らぬ面色なりしは。陰鬼陽人方異なれば。辭をかはし給はぬにや。それ歟あらぬ歟。思へども。思ひ難つゝ名残惜し。喃今一たび幻に。姿を顕し給はぬや。と空なる圓坐を搔撫て。鳴音を向の浦衡。翅の袖の潮垂て。磯にいるのみ。立ち去りし跡。俊平は理り。と思ふ心を鬼にして。こを慢ろ今更に。正しき證もなき者を。慕ひ給ふは迷ひぞ。仇人の所在も近づきぬるに。よしなき難きを諱忌あし。とく〳〵船へ還らせ給へ。と言語尖く奨して。海師の貝を引起し。もて来し餅を遺し置て。港口の方へ伴ふ折から。船より人の走り来て。只今風の直りたり。いや帆を揚るに乗給はずや。後ては後悔し給ふぞ。といそがし立るに驚かされて。主従齊一猛然と。走りて船に乗移れや順風に真帆揚て。其通宵走らしければ。次の日の晡時に。旗津の湊に着にけり。此處より伊万里へは。程遠からずと聞えしかば。黄昏比に推寛んとて。寝刃磨なる主従が。身装さへ精悍々々しく。勇進で陶焼く。伊万里の莊へぞ急ぎける。」不題。肥前國彼杵郡。伊萬里の莊に郷士あり。隠居して雅號を。語黙斎とぞ唱へける。陶朱が富にたらねども。所得の田圃百貫あり。咍して食ひ。織て衣る。家に奴婢なく妻子あり。浮世に疎く俗に不樂ても。寒けくも非ず。飢もせぬ。比は肆月の猛霽に。妻の手枕。女兒の糸萩。張り後まさぬ戸張の衣の。洗濯していそがしき。横日追ひ、五布六布。七つさがりに樹垣へ。よせ掛る戸のぬしは間も。あれで戀しき婿が跡を。まつと松とに繋ぎさし。箴刺の籰に絹刺の。長き日ながら由斷せし女の所爲の一人前に。足るや盥の糊糠も堅き家柄水入らず。親子等しき諸襷。かくる竹椽辛動や。と外面眺めて休ひし。母にをいとゞ優しげなる。心操さへ標致さへ。含がちなる糸萩が。愛敬つきて莞やかに。母さはけふは朝より。一日造作でいといたう。勞れもまさせ給はずや。茶々進らせんといひかけて。立んとするを推禁め。否措給へ吾儕より。你はさてこそ勞れけめ。折々發る持病の積の原はといへば婿がねの。浦二郎殿を三稔以来。信も非ず往方もしれず。忘れも得せぬ去々歳の。春如月の初旬。如此々々の事により。舎兄瀬川采女ぬ

根塚之妻
手枕語旧

なるべしともいひ難し。吾儕の昔ぞ罪深かる。これらによりて思惟るに。親の因果の子に報ひてや。文學武藝に才闌て。家柄もよき婿が孫に。早く縁しを結べども。まだ婚姻も整ず。只一宵の添臥も。得せずに三稔別れたる。伱の歎きを傍より。共に氣に病む親心。悔て返らぬとなげかし。我が子に隠をよしのなゝれば。懺悔話説をしつるのみ。正なき親と思はれん。恥しさよ。とむかしに。涙ぐみたる長物語を。聞くに悲しき糸萩が。慰めかねて共侶に。夕露ぞ置く袖笆の方に依りつゝ。應ざに。泣兒のみは隠せども。堪ぬ涙にくれいそぐ。えや入相の鐘の聲。日は沒果て鎮守の森へ。歸る烏も友音に鳴ば。手枕天がさ打瞻て。要なき言に時を移して。衣の乾くんも忘れたり。とり納れ給へ。と親子して。戸張剝しつ戸をかさよせて。序に背門を鎖をべし。こなたへ来ませ。と先に立て。奥庭望てゆく母の。後に從ふ糸萩も。盥引提ていそしげに。背門の方にぞ赴きける。此日も既に暮初て。人見えかぬ王莽時に。仇人の所在を索當て。外面に立つ秋布主從。俊平は庭門なる諸折戸を。推むかして。鼠川氏はおはし、候歟。あるじは在宿し給ふ歟。と呼門聲にあるじの翁は。人肌なる炬燵に倚て。臥たる枕を僅に擡て。根塚はおゝ、と。あるじもとれり。何處より来給ひたる。と云聲聞て走り入る。主從障子と蹴開きて。鼠川加二郎とく出よ。汝が爲に撃れたる。瀬川采女吉次が妻秋布。若黨村澤俊平ぞ。親良人の仇。主の讐。脱しはせじ。と刃と打振り。齊一進めばあるじの翁。なる何事ぞ。と驚きながら。枕をもつて秋布が。撃つ刀尖を受留め。炬燵櫓と楯にして。霎時二人を拄へけり。畢竟秋布主從と。あるじの勝負いかにぞや。それ次の巻に。解分るを聽ねかし。

松浦佐用媛石魂録後編巻之四終

松浦佐用媛石魂録前後二編姓氏目次

將相

北條時頼　北條時宗　北條實政

博多倍太郎正延　鼠川加二郎武行　長城野兵太敦宗　村山俊平　関養七　荒石勘八

牛渕九郎清縄　濱添甲　姓名佚　室津舩長乙　姓名佚　瀬川采女吉次　瀬川浦二郎選如　已上前編

根塚語黙齋　姥口歌二郎得時　海原澳進。無名少年　弁附　屋主店九郎　奴隷貫九郎　相肩捧太

三里非三　下禰冝海邊　已上後編出

士庶

瀬川健三道孝　長嵜頼綱　博多彌四郎素延

女流

南殿　木綿妙　玉嶋　博多彌四郎妻　姓氏佚　秋布　已上前編

手枕　糸萩　輪栗　千鳥　已上後編出

浮屠

大覺禪師　前編

逆臣

筑紫經高

逆徒

邊頓ノ平二將純入道　岩幕入道　浮簀伊加太　檜垣轉馬　經高已下ハ後編出

通計三十九名

姓氏目次　終

松浦佐用媛石魂録後編巻之五

東都　曲亭主人編次

第十九回

伊萬里の宿に親族再聚る

拮婦の城を覆すや。一念の致を所。秋布微弱の女流と雖も。資るに亦俊平あり。主従撃つ大刀透間もなく。踏入々々戰ふものから。此時既に暮初て。まだ燈火を点さねば。家の内鳥暗して。進退なかゝに便を得ず。加るに主の翁は。隻足人なるならずして。近来殊に病身なるも。原是武藝の達人なれば。二人を敵手に物ともせず。障子の邊に倚りけありける箴刺の鑊を掻取て。受流々々且く挑み戰ふ程に。背門の方より帰来ぬる。手枕は此大刀音に。強倫入りぬと思ひしかば。承塵に掛たる薙刀を。取卸し鞘を外して。出居の紙門を颯と開きて。えや俊平を薙んとはっ刃の光まに俊平は。主を援る暇なけきば。主の翁を打捨て。又手枕と戰ひけり。主従夫婦生死を争ふ。主客の勢ひ劣らず優さず。声をかけ氣を竃て。撃晃かき四口の刃を。夜間の嵐

松浦佐用媛石魂録後編巻之六

東都　曲亭主人編次

第二十回　舊怨を釋て善新怨を購ふ

登時根塚若二郎は瀬川吉次が物語に感嘆しつゝ、髀を拍て奇なるかな其相肖たる事。相貌身長語音まで兄弟一毫も違はぬ者は雙兒と云ともいと稀なりむかし唐山に。張伯階と云者あり。そが弟を張仲階といひにき。兄弟よく相肖たる事譬ば影と貌の如し。有此而あるとき。仲階が妻某氏いと唯妍に化粧しつ。兄伯階がほとりにゆきて。けふのわらはが結髻化粧を。未ざよくも見給はずや。美しうこそ侍らめ。と打戯れて。伯階が。手をとらんとしてければ。伯階驚き訝りて。あるにが弟の仲階ぞと。思ひたがへしものならん。と早くも悟りて打微笑。われを是伯階なり。仲階には非ざりしと。云に其妻駭き羞て。忽地走り退きつ。姑くして又伯階が。端近く出て在をりし折。彼妻亦遥に見て。あれは真のわが夫也。と思ひつゝ、身

篆七語音 日拙金讀 手枕東

吉次夫妻
與蓑七出
根塚家、
根塚子無
荻、錯認
吉次作浦
二追之、

紛れて○介抱ふいと等閑なりしと○いひつゝ蓑七吉次夫婦○手枕も共侶に○従右自左○進ミより○やよ俊平村澤氏○辞の趣の聞えし歟○吉次は恙なし○蓑七も還り来つ○甚麼ぞや什麼ぞやと○諸聲一齊問慰めて○抱起しつ勦れば○俊平僅に眼を開しく○左見右見つゝ笑の中に○心撓襏く轄忽離と○忽地息は絶ふけり○噫とむらりふ泣く手枕が○覺て空しし夢の迹○浮世の秋と秋布が○倶に唱る佛名の○南無阿彌陀佛○阿彌陀佛○阿彌陀佛○阿彌陀なみぞの諸時雨○夜風寒けく更闌く○夏なし宿ぞ衰れなる○

第廿一回

執念利鎌に入く夫妻を追ふ

却説関蓑七は○若二郎夫婦と商量して○俊平が亡體を○桶に斂めなどしつゝ○其曉方に擡出して○背門より一町ぞらりなる○田の畔の墓所に埋めて○雛松を栽く表とを○詰旦若二郎は能化寺の法師を招しく○追薦讀經叮寧に○俊平が菩提を吊ひけり○其事果く若二郎は○吉次主従に相譚やう○母屋とく幾間もあらぬを○夫婦主従一處にをはさば○心詰りにあらんぞらん○與庭の前面に○細小なる離屋あり○こは 某が里人等に○武藝を教さりし吐稽古所に建さるゝ○久しく人は住ねども○舊さる儘ふ○網代天井もあり○席薦も今ふ布てあり○けふより彼處へ移らせ給へ○朝夕の食物は○母屋より進らせせん○近属世の風聲を傳聞しふ○彼經高は西海に○今なほ隠れをるといへり○然りけれども其隠宅を○定らふしきる者なしとぞ○かゝる便宜も候へば○今茲はしゝに杖を駐めて○經高等を索ね給へ○某も亦此義ふ就く○凡心の及ん限り○穿鑿をべく候と○云に吉次秋布蓑七○主従齊一歡びく○一議に及ばぞ○此日より○根塚が家の與庭なる○離亭ふ移りけり○とかくをる程にえや○俊平が初七日の逮夜ふもなりしらば○吉次は○今朝とく○手枕に郷導せられて○能化寺へ詣しが○亭午の比ふ歸来ふけり○抑 此能化寺の本尊は○平将門が女兒なりける○如藏尼の作物ふく○利益ありとぞ云なる○有比者只俊平の爲のミならで○浦二郎が冥福をも○祈らんとての所行なれば○又未の左側より○秋布は蓑七を将て○件の御寺へ參詣を○是回の郷導ふは○あるじ若二郎が○杖ふ携りつゝゆくめり○此比までも糸萩は○只吉次を浦二郎ぞと○思ふ疑の解ざれば○妬し事限りも非ぞ○二親の暇ある毎ふ○竊ふ蓑七に唯諾さる○事の情を説示して○さはぐふ諭せども○

東京…出版社

松浦佐用媛石魂録後編巻之七

東都　曲亭主人編次

第廿二回　乾坤丸中に亦復親族を聚ふ

案了前齣再説。前採題經高は。迹を暗まし影を隠して。三総追捕を免れたる。縁由を原るに。曩に經高孤城に篭て。鎌倉の追討使。實政の大軍に。捕圍まれし時。城中の脱穴より。士卒と共に落亡せしに。頼切たる股肱の老黨。邊虮ノ平次將純すら。主を棄て行方を知らせず。況其餘の軍兵は。僉四落八散になり果て。身に隨ふ者とては。浮賓伊加太郎。檜垣轉馬。と呼れたる。只兩箇の若黨のみ。左右に扈從したりける。現落人の治習とて。天に跼り地に蹐しく。杣木樵る山の賤婦に。一碗の糧を乞ひ。網曳する浦の蜑戸に。半夕の宿を討んと欲するに。人僉逆徒の殘兵ならん。と思へば是を憐まず。壯佼等を驅催して搦捕んとしたりしかば。辛く其所を立去りて。ゆき〳〵て松浦なる。今福の浦を過る時。日は暮たれど宿もな

B 23475

室子舍耳房あり。局の内なる前裁には。花紅葉のいろ〳〵なはと栽並べ。菜園の畝毎には。寒暑の時に從て。百の種子と蒔砌さは。異木芳草の美しき。枚挙はに遑あらず。且弓箭刀戟のいと多なは。衣裳調度に至るまで。満足らずと云となければ。波底にありと云。龍宮城にあらざりせば。水仙人の聚ふと云。貝闕玉洞ならん歟。と疑惑ふ可にて。目を驚さず。と云となし。有此而姥口歌二郎は。上座なる裀の上に。經高を請登して。船中にある宗徒の士卒を。悉見参せしめ。且嬋娟さる美女十人むらりを。其左右に侍らして。祝壽の盃を薦めさる。饗饌大方ならざれば。經高歡喜雀躍して。望足りぬ。と思ひけり。勢ひかくの如くなれば。檜垣轉馬浮簀伊太郎等は。忽地野心を轉して。主に從ふと故の如く。且歌二郎に媚諛ひて。酒肉の餘鼎を貪りつゝ。光陰をあゝに送りけり。然程に姥口歌二郎は。乾坤丸の連環船を。一所に繋置らず。遠き時は千里二千里。近しと云とも百里二百里。陸を距て海に浮みて。進退出沒。世の人の。知るとを要せず。さま〳〵月暗く。風波靜なりし夜は肥前の九艘見崎に船を近づけ。或は江浦東島。若松西島。奈留兵庫。得仙白石。佐井宮岡。榮螺赤島

加二郎見經
高

に船歌りして。曉方になる毎に。船を遠く退けて。浦曲に親しむとなければ。九个國の武士守護人も。定かに是を知る者なし。あゝをもて鎌倉より。追討の沙汰もなく。既にして三稔を歴たり。されば此歳月を。空に送らざる者は。歌二郎只一人のみ。鎌倉の風聞を探て知らん為にとて。東へ赴く時もあり。或は智勇捷れたる。郷士浮浪人を相語て。いかで身方になさんとて。折々南北に旅宿して。或は二三个月。或は半年他郷にあり。經高主從は。歌二郎にのみ憚りて。渠が船中に在る時は。酒宴遊興稀なれども。其他郷にある時は。酒に耽て色を好みて。管絃のしらべ絶る隙なく。酒池肉林の宴樂に。驕奢を極めて逆謀を事とせず。生涯かくてあらんには。樂み王侯にも優りたり。尚限りなき齢をたもちて。いつまでもかくの如く。あらまほしけれ。と思ひしかば。心利たる雜兵を。彼此へ遣して。不老の術。不死の藥を。訪るを頼りに。不題鼠川加二郎武行は。曩に相摸なる動の磯にて。瀬川釆女吉次を狙撃し時。身方の兩人。長城野兵太と奴隷貫九郎は。必死の深痍に仆れしかども。其身恙なかりしかば。早く其處を立去て。攝津の兵庫に躱れ居たるに。鎌倉執權の下知として。逆賊經高

問れて加二郎は。肚裏に思ふやう。是れは兵庫に在りし比より。這經高を擊捕て。鎌倉へ歸參せんと。思ひにけれど在處知ざねば。空に三稔を過せしに。今圖らずして經高が。隱宅に来ぬる事。寔にこよなき幸ひ也。渠身のよるべなくなりて。船に住ひ水に漂ひ。些の安樂に誇るとも。いかばかりの事やはある。且くこゝに足を駐めて。折を鬩ひ擊捕るべし。經高とざまに結果なば。餘の奴原は怕るゝに足らず。吁さらなり。と立地に。分別しつゝ。莞爾と笑みて。むかし齊國の孫臏は。片足痺て候へども。智謀は後の世まで軍師たり。我朝なる。鎌倉權五郎景政は。矢傷に隻目を失ひしかども。萬夫無當の勇士也。とある人のいひ候ひき。さればこそ君も某が。尪弱不具なるを嫌はせ給はで。召使んと仰せらるゝ。此身の幸ひ何事歟是に優べき。いかで犬馬の力を盡して。時宗を討滅さん。計議を旋らし候はん。既に主從さる上は見參れ。牽出物に。其名刀はそが儘に受收めさせ給へかし。價を望候はぬ。といひ瞞せる佞辯を。經高疑ふ氣色もなく。然らば鼠川加二郎に。兩刀衣裳を取らせよ。と聲高やかに呼れば。遠侍なる近習の壯佼。承りぬ。と應つゝ。大小の刀二口と。小袖袴

姥口縛吉次、烋布、根塚、手枕、簑七、等到乾坤丸、乞児亦在、

をとり具ひて。長盆に打戴せしと。やゝ兩人してもて来にければ。加二郎是を受戴きて。恩を拜し退きて。件の衣裳を被さりける。登時經高は。加二郎を將て来さる雜兵等を勞へば。皆額をつき痿痺を捺りて。武者屯へ退く程に。加二郎は衣裳を更め。中刀を腰に帶て。又經高に見參を。經高是を召登して。主從不轉の盃を取らせんとする程に。矮屏の陰よりして。吾君霎時等せ給へと。禁めて顯れ出る者あり。經高主從驚きて。齊一其方を見かへれば。是則別人ならず。姥口歌二郎得時也。病後の衣裳華やかに。腰刀をとり退け。主に對ひて禮儀正しく。恙なきを祝しさる。辨舌人柄重くれて。席上の盃盤を。苦々しげに打見さる。氣色に憚る檜垣轉馬。浮簀伊加太は身を縮して。序次わろしと思ふのみ。歌僲に侍りし侍兒等を。誰分付ねど盃盤を。手にとりて身を起しつゝ。逃るが如く退きけり。そが中に經高は。酒嗳して貌を改め。こを珍らし歌二郎。嚮にを所勞あるよしにて。久しく對面せざりしに。思ひがけなき俄の出仕は。病著既に瘥りし歟。火急の要譚ある故歟。と問へば歌二郎膝を進めて。さん候。賤恙全く瘥らねども。申上べきよしあれば。推て只今出

絲萩之血鮮、浦二潮赤、

ず。と云に經高領きて。其義は既に任しさり。されば又席を易て。思ひの隨に醉を盡さん。伊加太轉馬加二郎等も。おなさへ来よ。と鷹揚に。身を起しつゝ。除々と。後堂に退くと。霎時目送る歌二郎は。雜兵等に下知を傳へて。吉次と牽立させ。養七若二郎を捕巻して。秋布と手枕と。追立々々散動々々と。はや庭門より出て行ば。向の癩人の索拿さる。雜兵等は渠が左右の手を。各々肩に引被て。倶に跡に續きける。

第廿三回　賢寧凱旋を大團圓

陰は濁て明ならず。悋て且妬むと。禽獸虫魚も皆相同じ。女子にして嫉妬なきは。七去の一去を免ると雖も。和漢今昔。あること稀之。そが中に甚しきあり。又甚しからざるあり。甚しきを妬婦と云。こゝに亦其一人あり。根塚若二郎が女兒糸萩是なり。迷ひの雲に身を蒸されさる。愛惜の執念利鎌に入て。縛の索の斷離れし時。手に把る鎌を腰に挿て。吉次夫婦を追蒐つゝ。外面投て出されども。聊時の後れしかば。既にして其往方をしらず。心いよ〳〵焦燥て。是首歟彼首歟と索る程に思はず。旗津の港口に来にけり。と見れば二艘の平駄舟。繫留て水際にあり。當下糸萩は。舟人を呼かけて。喃其船にもの問ん。廿あまりなる美男子と。十八九なる女子の。おゝらへ来つると見給はずや。と問へば一箇の舟人が。身を起しつゝ欠伸して。来ぬるとも〳〵。問るゝ如き若き男女は。嚮に快船に打乗て。松浦の方へ。走りさし。と云に糸萩逼立て。されはそ件の人々と。追ひつゝこゝに来ぬる者なら。いろむろまの足なりとも。船賃を歎しからず。乗して追著給へかし。と憑めば舟人微笑て。原来御身は清媛歟。こゝは日高にならねども。世渡りなれば推辭んや。疾乗給へ。と應をしつゝ。竿とり詰て推寄する。船に閃りと打乗れば。又推出し纜を張りて。其處ともしらぬ澳の方へ。漕ぐと幾里なるをしらず。此夜は月明に。海上靜なりければ。船の疾と大方ならねど。脱れし人にはまだ追はで。はや曉方になる隨に。糸萩は心氣疲れて。寐るとはなしに目瞬々ん。驚覺て。四下を見るに。何の程にか天は明て。日影斜に未の左側之。昨宵正しく乗りし。平駄船は何地行けん。身は大きなる家の内の。廊の下に臥さり。こは什麼奈。と胸潰れて。夢か現か。とばかりに。疑惑へば。居て見ても。起ても更に安からぬ。心を漸く推鎮て。こゝは

秋布撃父仇鼠川、

に留りて。一臂の力を勠せんと。只管請て已ざりけり。登時浦二郎は。腰に帯たる兩刀と。戰袍を恭しく。兄吉次に返して云やう。これは皆御身の物なりしを。某借用して。鎌倉へ赴く折。兩刀を海底に遣せしに。不老不死の中刀は。加二郎が綱に罹り。大刀は又姥口主の。何の程にかかつぎ揚て。けふ某に賜ひにき。先はや是を受とり給へ。と云に吉次歡びて。此兩刀は親の像見。戰袍は君の賜なると。失はずして返さるゝ。是も亦姥口主の。庇にてありける歟。三稔以来わが腰に。帯たる和殿の兩刀と。とりかゆべしとて遞與つ受つ。兄弟夫婦仇討の。準備に暇なかりけり。然程に鼠川加二郎は。吉次降參せざるにより。走馬場の竈の中にて。不老不死の名刀を。錐して御覽に備へよと云。下知を歌二郎の傳へしかば。歡ぶと大方ならず。はや時刻にもなりしかば。組紐の襷を被て。袴を裾高に結て。奇物造りの兩刀を腰に帯て。ひとり走馬場に立出たり。且くして經高は。彼名刀の鈍利を見ん爲に。檜垣轉馬。浮賛伊加太郎等を從へて。幔幕打たる觀駿舍の儲の裀に著にければ。姥口歌二郎得時は。百五六十箇の雜兵に。馬場の四方を打囲しつ。其身は床几に尻を掛て。觀駿舍の埒の中央にをり。既にして加二郎は。歌二郎が身邊に来て。彼名刀を乞求れば。歌二郎微笑て。件の不老不死丸は。和殿が吉次を斬る時に。某是を遞與すべし。權く等ね。と推禁め。東の方に打對ひて。秋布主從。瀨川兄弟。とく〳〵出よ。と呼はれば。風も漏さず立囲みたる。雜兵等が背の方に。忽地阿と應しつ。秋布は白き夾衣に玉襷して。薙刀を挾み。関養七を從へて。いち早く進み来れば。瀨川采女吉次は。弟瀨川浦二郎選如と列立て。錦の戰袍を被下したる。肌膚には細鎖の帷子を著て。手甲臑楯に身を固め。各々兩刀を腰に帯て。竈の中にぞ入にける。登時秋布主從は。加二郎が左右より。進みて近づき佗と疾視て。不俱戴天の父の讐。鼠川加二郎覺あらん。汝が謀書の故をもて。冤枉に命を隕せし。博多彌四郎素延が女兒秋布。從僕関養七。と名告らずともよくしりつらん。覺期をせよ。と詰よれば。加二郎大く駭きて。是は抑いかにぞや。經高公に從はねば。錐物にせらるべき。吉次夫婦主從が。此光景は何事ぞ。と問せもあへず歌二郎は。呵々と冷笑ひて。愚なるかな加二郎武行。瀨川吉次等は既にはや吾君に降參して。仇討の事を願へり。これは知らずと思ふらん。汝は還て野心

東京金玉出版社

吉次等擊
經高

あり。經高公を擊捕て。鎌倉へ立歸り其身の罪を贖ん。と豫て伎倆し淺智の胸中。隱むとも
えや發覺さり。とく／＼勝負を決せよ。といはきて加二郎脫る、路ふく。怒きる聲をふり立
て。原来まが計較の裏を早くもか、きみけり。其議ならば武行が。本事を思ひ知らきべし。觀
念せよ。と喤呷ふ匈匈て。刀を拔て擊んとするを。秋布は薙刀もて。拂退け進ミ入て面もふ
らず戰へば養七も又秋布を。資けて挑む刃の電火。丁々磤と擊あふさる。後の方まは浦
二郎が。身方を勇る聲高やらま。動の礒の遺恨を讓まて。まれ後見をするからふ。嫂御前心
強かるべし。透を窺ふて薙給へ。左よ右よ。と烈しう助言み。加二郎いよ／＼焦燥て。背み立
さる浦二郎を。斬んと見かへる敵の透間を。秋布得たりと薙刀を。振閃して丁と砍る。刃
の光み加二郎は。蜂谷三寸深瀕と負て。怯むを透さず養七も。一大刀當る主の仇。力を勠し
て斬伏せたり。當下秋布は。腰み挿さる命婦丸の。短刀を引拔て十々滅を刺て立あがれば。歌
二郎は扇を拔さて。あふぎ立つ、稱賛を。然れば瀨川同胞兄弟の歡び。いへば更ゝ。是を見る
雜兵等も。聲を合して譽みけり。既みして經高は。瀨川同胞秋布等を。觀駿舍へ召登して。主

從一味合体の。盃を取らせんとて。欣然として俟程み。歌二郎み相伴る、吉次はえや浦二
郎と。共侶ま登り来つ主の身邊み侍りさる。伊加太轉馬を蹴倒せば。兩人齊一驚怒まて。
身と起しつ、腰刀を。拔んとするを拔しも果ず。晃めかしさる胞兄弟が。銳利き刃ま伊加
太郎。轉馬も首と擊落されて。左右ま撲地と仆きたり。思ひがけなき爲体み。經高頻まみ驚
騷ぎて。寄れや者共。此癖者を。とく擊留よ。と呼まて。逃んとすれば外面より。秋布養七走り
聚ふて。先路を早く塞ぎさる。後の方みは吉次選如。倶み勇る聲高やらみ。逆賊經高逃ると
て。何處へら脫をべき。まれ豫てより時宗朝臣の。御諚み從ひ奉まて。久しく索し甲斐あり
て。姥口氏の内應を得さり。よりて目今誅するぞ。刃を受よと名告かけて。胞兄弟齊一擊大
刀風み。經高は拄らねさる。深手み撻と倒きしを。起直まて聲を立哥。まが忠臣と思ひさる。
歌二郎さへ心變りて。見つ、救はぬ非道の擧動。噫朽をしや。と敦圉ば。歌二郎進ミ出。呵々
と打笑ひて。經高かくてもまだ曉得らずや。まが今福みて自滅を救ふて。三稔汝を養ひしは。
謀反み與する所以み非ず。まれと累世因ミある。瀨川氏胞兄弟の厄釋故郷へ歸る時。汝を擊

姥口者竜神也顕本相駕雲而去

して大功を立させんと思へばなり。然れば此。乾坤丸の連環船も。樓閣亭舎も。美女雜兵も。我が妙術の致す所。皆是海市蜃氣樓の類なるを知らざるや。雖然三稔来。よし夢をのみ見せさるは。謬て汝が爲に。軍師となりし清繩が。受さる俸禄の恩に答る。我が聊の心操なり。疑しくば彼を見よ。といひつゝ。秘文を唱れば。今まで四下を捕囲みさる。百五六十箇の雜兵は。忽然として小蛇に變じて。齊一海に飛入て。往方もしらずなりしかば。經高駭怪みて。忙然さる後の方に。はや立遶る吉次が。一声かけて閃かす。刃の冱に經高は。頸を撃れて仆れたり。浩處に若二郎は。手枕と共侶に。物の蔭より出て来つ。人々に打對ひて。姥口主の懇切に。糸萩が亡骸を。戌りて歸れといはれしかども。仇討の縡の趣と。見んとて彼處に候ひし。獨加二郎のみならで。經高さへに誅伏せしは。寔に國家の洪福なり。是に就ても糸萩が。といひつゝ、眼包を屢動けば。歌二郎慰めて。其愁嘆はさる事ながら。本是因縁あることなれば。必しも悔べからず。嚮にも説示せし如く。浦二郎が前身は。調吉士伊企儺なり。伊企儺が妻大葉子も。節を守り歌を詠じて。新羅の軍兵に。殺されたり。そが後身は鎌倉な

る。博多倍太郎正延が女兒千鳥これなり。此少女は浦二郎の妻になるべき者なれば。そを糸萩ぞと思ひ做て。親まば久後安かるべし。只吉次の前身の。大伴挾手彦なる。又秋布の前身の松浦佐用媛なるのみならんや。浦二郎千鳥等も。亦かゝる因果あり。努々疑ふべからずと云に衆皆感佩して然るにても姥口主は鬼神を欺く智術あり。且釆女浦二郎に。舊縁ありと宣ひしは。いかなる故に候ぞ。と齊一問へば。頷きて。今は誰にか隱むべき。我れは長門の向の洞に。數千載住る龍神なり。吉次選如等が外戚さる。岬氏は我が子なりし。龍村の後裔なれば。捨難き思ひあり。おゝをもて三稔来影に立形に添ふて。其尼難を防戌て。縡のこゝに及べるなり。同胞功成り名を遂させれば。是よりして相引きん。東の磯に二艘の船あり。其一艘には瀨川胞兄弟。萩布養七等打乗りて。早く鎌倉へ赴くべし。又一艘には根塚夫婦糸萩が亡骸を打乗して。伊万里へ歸りて埋葬せよ。今はしも是までなり。さらばさらば。といひかけて。たづかに出る外面に。降集ふ雲に打乗りて。はや空中に登ると見えし。形體は忽地金色の神龍と顯れて。長門の方へ飛去る程に。乾坤丸の大船殿舎も。煙の如く消失せて。肥前州に

吉次兄弟往鎌倉浦二娶千鳥

ありと云。無人嶋にぞなりにければ。綷は不測に吉次等。兄弟夫婦主従は。駭嘆せぞと云者なく。倶に其方と伏拝みて。尚久後を祈りけり。かくて吉次秋布浦二郎養七等は。經高主従の三箇の首級と。鼠川加二郎が首級を携へて。若二郎手枕と共侶に。龍神の誨に従ひて。東の磯に行て見るに。果して船二艘あり。そが一艘には。糸萩の亡骸さへ乗してありしかば。衆皆いよ〳〵龍神の冥助を仰ぎ尊みて。迭に再會を約し袂と分ちて。各々船に乗ける。其両船は自ら。東西に別れて走るに。飛鳥よりも速なれば。若二郎夫婦の乗さる船は。瞬間に旗津に著さぬ。又吉次等が乗さる船は。数百里の海上を。只一晝夜に。走る程に。次の日未の比及に。鎌倉に著しかば。吉次は。浦二郎秋布を相伴て。執権の御邸に赴き。經高加二郎等を撃捕さる。事云々と訴けり。登時北條時宗朝臣は。吉次が恙なく。帰参しを訝りながら。召近づけて其綷の趣を問給へば。吉次は。其身夫婦の事の顛末。并に弟浦二郎が事。後平が枉死。養七が事。又若二郎夫婦。糸萩が事。すべては向の埼なる龍神の。擁護によりて。本意を遂さる。一五一十を述説て。秋布に給はりさる。仇討免許の御教書を返上しければ。時宗

秋布更名菊子

感心大方ならず。浦二郎秋布養七等にも。共侶に見参せしめて。褒美の辭を給はり。軈て首級實撿ありて。經高主従加二郎等を梟首せしめ。然后吉次には舊領の外に。采地五千貫を給はりて。頼綱の次職になされ。浦二郎にも。荘園多く宛行ひ給ひて。本の龍華へかへし。遣し。且隔年に鎌倉へ参勤せよと命ぜらる。されば又博多倍太郎え。龍神示現の趣を。傳聞て疑ふことなく。其女児千鳥をもて。浦二郎に妻えしつ。且根塚若二郎手枕を。親の如く。又舅姑のごとく親えうせよ。と教訓して。倶に肥前へ遣しけり。かゝりし程に秋布は。南殿に見参して。龍神に解示されし。あぢのむら鳥と糸の效證を。云々と聞えあげしかば。南殿歓び給ひて。且仇討の恩賞あり。扠宣ふやう。秋布は石切山なる。叢菊の中にて。生れたりといへば。菊子と呼べきものならんを。當時諱よしありければ。菊の異名を取たりと聞ぬ然らばけふより改めて。菊子といはまほしけれとて。件の名をぞ給はりける。有此而秋布の菊子は。其次の年より。六七年の程に。男児四人産にければ。吉次其二男をもて。外祖博多彌四郎が家を嗣しめ。三男を養七に養して。関氏を冒し。四男は後平が後として。村山氏を冒しけり。又

おゝ母及べるのミ。看官是を察しねかし。

松浦佐用媛石魂録後編巻之七終

明治十六年六月十日御届
同　年同月十五日出版

翻刻出版　東京金玉出版社
東京麹町區飯田町三丁目十九番地

出版委員　東京府平民　吉井幸造
神田區猿樂町三丁目壹番地

東京金玉出版社之印

各地賣捌所

東京　和泉屋市兵衛
同　大倉孫兵衛
同　出雲寺萬次郎
同　万字堂本店
同　求古堂半造
同　巖々堂
同　秩山堂
東京　森屋治兵衛
西京　田中治兵衛
同　山田茂助
大坂　柳原喜兵衛
同　前川善兵衛
同　岡嶋新七
武州横濱　吉川伊兵衛